D-1

シダーマ語の「言う」／「する」を使った表現の慣用化：脱イディオフォン化と語形成

河内　一博
防衛大学校
kazuhirokawachi@gmail.com, kawachi@nda.ac.jp

発表要旨：シダーマ語（クシ、エチオピア）には、「言う」*y-*／「する」*ass-* を表す動詞とともに、他の表現では通常使われず、屈折変化をしない語（以下で X）を使った慣用表現がある。同じ X に対してどちらの動詞を使うかにより他動性の対立を示すことが多い。X はイディオフォンから発展したと思われる擬音語であることがあり、脱イディオフォン化とともに X は慣用化されている。Dingemanse & Akita (2016) と Dingemanse (in press) によると、表現性と形態統語的統合度は反比例する。シダーマ語の場合、脱イディオフォン化とともに X は言語音でなければなくなり音韻的に制限を受けるという点で表現性を失っている程度であり、形態統語的統合度も大きく強まっているとは言えない。ところが、X が独立した品詞として機能するようになっているという点、さらなる慣用化でこの慣用表現から短縮された動詞や、X から派生した名詞があり、語形成や派生を起こしているという点で、文法のシステムに統合されていると言える。

1. はじめに

1.1 本研究の目的　シダーマ語には、(1) のような「言う」*y-* ／「する」*ass-* を表す動詞を使った慣用表現（例：(2), (3)）がある。（この言語で動詞の語根は拘束形態素なので、以下では動詞を不定詞の接尾辞 *-a*（*y-* の場合 *-aa*）を付けて表記する。）「言う」*y-áa* ／「する」*áss-a* を表す動詞の直前に起る語 X は、一形態素から成り、高いピッチが後ろから 2 番目の母音に起る。X は、どの品詞とも違う振る舞いをする。常に *y-áa/áss-a* を伴い、他の表現では通常使われず、屈折変化をしない。

(1) (a) X *y-áa*（通常、自動詞）／(b) X *áss-a*（通常、他動詞）

(2) (a) sutaasínč-u　míllі　y-ø-inó.
swing-NOM.M　*milli*　say-3SG.M-D.PRF.3
'A swing moved.' (CAL Discourse: SID SUBJ ID22; HOIproc1_swing)
(b) ...　mánč-u　sutaasinčó　míllі　ass-ø-inó.
man-NOM.M　swing.ACCOBL　*milli*　do-3SG.M-D.PRF.3
'A man moved a swing.' (CAL Discourse: SID SUBJ ID20; HCOproc1_swing)

(3) (a) č'eíččo　báta　báta　y-i-t-e　buub-b-ú.
bird.NOM.F　*bata*　*bata*　say-EP-3SG.F-CVB　fly-3SG.F-R.PRF.3
'A bird flew producing the sound *bata bata*.'
(b) č'eíččo　k'oollá-se　báta báta　ass-i-t-e　buub-b-ú.
bird.NOM.F　wings.ACCOBL-3SG.F.POSS　*bata bata*　do-EP-3SG.F-CVB　fly-3SG.F-R.PRF.3
'A bird flew causing its wings to produce the sound *bata bata*.'

本発表では、これらの表現が慣用化する際に起ったかもしれない脱イディオフォン化、およびさらなる慣用化の過程で起こっていると思われる語形成と派生に関するデータを提示し、慣用化の過程におけるこれらの表現の文法的特徴の変化、X の文法のシステムへの統合について述べる。

1.2 シダーマ語の文法的特徴の概略　シダーマ（/sidaáma/）語（アフロ・アジア大語族、ハイランド・イースト・クシ）はエチオピア中南部で約 300 万人に話されている（2007 年国勢調査による）。都市部の若者の話者の多くはエチオピアの公用語であるアムハラ語を第二言語として話す。基本語順は SOV であるが、語順は比較的自由である。接尾辞を使う言語で、対格型の形態的格標示をし、動詞の屈折接尾辞で表される文法的概念には、アスペクト、ムード、主語および目的語（通常 primary object）の人称・数・性、副動詞（converb）等がある。自動詞化よりも頻繁に他動詞化をする言語であり、自動詞を他動詞化するのに使役の接尾辞 *-s* を自動詞の語根に付ける。

2. 先行研究　Dingemanse & Akita (2016) と Dingemanse (in press) によると、表現性 (expressiveness) と文法への統合（形態統語的統合）は反比例する。表現性が高ければ高い程、文法への統合度は低く、表現性が低ければ低い程、文法への統合度は高い。表現性のあるイディオフォンは形態統語構造に統合されていない傾向がある。表現性がよりあるということは、イントネーションや発声において目立たせること（intonational/phonational foregrounding）や表現性のある形態（例えば、反復）の使用（expressive morphology）によって特徴付けられる。文法への統合はいかに形態統語的に統合された構文で使われるかということで、周辺的なものやあまり埋め込まれていないものは、あまり統合されていないということになる。

東アフリカの言語（および他の多くのアフリカの言語）、特にエチオピアの言語には、「言う」を表す動詞と「する」を表す動詞の両方またはどちらか一つとともに形成され全体として動詞としての機能を果たす

慣用表現がある (Ferguson 1970, Cohen et al. 2002)。アフリカ（主に東アフリカ）の言語の「言う」／「する」を使った慣用表現の通言語的研究である Cohen et al. (2002) で記述されている慣用表現（彼らは descriptive compounds と呼んでいる）において「言う」／「する」を表す動詞とともに使われる語 X は、どの言語においても、擬音語、あるいは動詞、名詞、形容詞のどれか、またはそのどれかから派生した語であり、シダーマ語の慣用表現のように X がたいてい慣用表現以外に使われない言語の例は報告されていない。（ところが、周辺の言語、例えばカンバタ語（ハイランド・イースト・クシ）やウォライタ語（オモ）でも慣用表現以外にはほとんど使われないようである：若狭基道氏 p.c.。）Cohen et al. は、いくつかの言語の慣用表現において「言う」／「する」を表す動詞が助動詞、そして接尾辞に発展している事例を記述しているが、シダーマ語の場合そのようなことがあるとは言えない。したがって、このようなシダーマ語の表現の表現性の違いが文法への統合の度合いの違いとしてどのように現れるか調べてみる価値がある。

3. シダーマ語の「言う」／「する」を表す動詞を使った表現のデータ

3.1「言う」／「する」を表す動詞の引用のマーカーとしての用法　シダーマ語の「言う」*y-áa* と「する」*áss-a* は副動詞の形式で引用のマーカーとしても使われる。（特に、*y-áa* の副動詞の形式は、発話や思考にかかわる動詞および言語行為を表す動詞とともに使われるが、この用法はここでは扱わない。）X は言語形式かもしれないし、非言語形式かもしれず、言語形式だとしても慣用化されていないので、X に起り得る形式の数は無限にある。X が主語の名詞句の指示対象が（動物の場合、口（まれに鼻）から）発した音か（例：(4a)）、主語が人間または非人称で、かつ主語の名詞句の指示対象が他者に働きかけることによって出した音か（例：(4b)）によって、*y-áa* と *áss-a* が使い分けられる。*y-áa* が使われる場合、X は主語の名詞句の指示対象が言った語句や文かもしれないし、発した声（例：叫び声）を真似たものかもしれない。*áss-a* が使われる場合は、出た音を真似たものである。いずれの場合も、音を真似た、慣用化されていない形式は、非言語音であるということもあり得る。

(4) ísi　“X”　(a) y-ø-e/(b) ass-ø-e　saané　hiikk’-ø-inó.
3SG.M.NOM　X　say-3SG.M-CVB/do-3SG.M-CVB　plate.ACCOBL　break-3SG.M-D.PRF.3
(a) ‘He broke a plate saying “X”/producing the sound “X” from his mouth.’
(b) ‘He broke a plate causing it to produce the sound “X”.’

3.2「言う」／「する」を表す動詞を使った慣用表現　シダーマ語の「言う」*y-áa* を使った慣用表現と「する」*áss-a* を使った慣用表現でこれらの動詞の前に使われる語 X は、3.1 の構文においてとは違って慣用化されていて限られた形式しか使われず、他のどの品詞とも違う振る舞いをする。*i* で終わることが多いが、必ずしもそうではない。（他に語の最後に来る *i* の形式としては、動詞の 2 人称単数の命令接尾辞と、男性名詞の主格および属格の接尾辞の異形態の一つがある。）慣用化されているので、X に新しい形式が生産的に使われるということはない。

X は独立した語である。第一に、この慣用表現において、X と *y-áa/áss-a* の間に他の語（例えば主語の名詞句）を挿入することができる。第二に、否定のクリティック *di=* は *y-áa/áss-a* に付き、X には付かない。また、X は形態統語的に他のどの品詞の語とも違う振る舞いをする。例えば、名詞や副詞と違って、X は分裂構文の焦点として使えないので、名詞でも副詞ではない。また、X に動詞や名詞や形容詞に付く屈折接尾辞を付けることはできない。

これらの表現が表す意味は様々で、特定の意味分野に限定されてはいない。X は擬音語である場合があり、その度合いは個々の X によって違うものの、慣用化されている（例：(4b) の場合、*káša káša, bútu bútu, báta báta*）。また、X が繰り返されて、動作の反復や状態の漸次的変化を表すことがよくある。多くの場合、同じ X とともに *y-áa* も *áss-a* も使うことができ、*y-áa* を使った慣用表現（自動詞）と *áss-a* を使った慣用表現（他動詞）はたいてい他動性の対立を示す (例: (2), (3))。

これらの慣用表現は、主動詞よりも、(3) のように副動詞あるいは同時性を表す構文の従属動詞として使われることが多い。筆者が収集した Wallace Chafe の Pear Film の語りのデータ（被験者 20 名）では、延べで合計 44 回 *y-áa/áss-a* を使った慣用表現が起こったうち、主動詞で使われたのは 2 回（4.5%）だけだったのに対し、副動詞で使われたのは 37 回（84.1%）あった。

3.3「言う」／「する」を表す動詞を使った慣用表現と関連した形式　*y-áa* を使った慣用表現（以下で (A)）または *áss-a* を使った慣用表現（以下で (B)）（通常 (B)）を短くし、X の最後の母音を *-eess-a* または *-is-a* に替えた動詞の形式（V-*eéss-a* または V-*ís-a* ; 以下で (C)）が存在することがある。この *-is* という形式は使役接尾辞 *-s* が子音連結か重複子音で終わる動詞の語幹に付く場合の、母音挿入された形式 *-i-s* と同じである。さらに、X の最後の母音を、動詞の名詞化接尾辞（*-o, -a, -e, -anšo, -atto, -ano, -(i)ille, -imma* 等）の一つである *-o* に、または *-eéss-a* に替えて派生した名詞（以下で (D)）がある場合がある。

これらの *y-áa/áss-a* を使った慣用表現とこれらに関連した形式 (C) と (D) のほとんどは、表 1 の [1]〜[3] の 3 つのパターンのどれかをとる。（後で、*y-áa/áss-a* を使った慣用表現は表 1 に示した順番で発展して来たという仮説を立てる。）[1] では、(A) と (B) はあるが、(C) と (D) は存在しない。[2] では、(A) と (B) に加えて (D) があるが、(C) はない。[3] では、(A), (B), (D) に加えて、(C) がある。

表 1: シダーマ語の「言う」／「する」を使った表現と関連している（と思われる）形式のパターン

パターン	(A) *y-áa* を使った表現	(B) *áss-a* を使った表現	(C) 短い形式の動詞	(D) 名詞
[1]	✓	✓	——	——
[2]	✓	✓	——	✓
[3]	✓	✓	✓	✓
[4]	——	✓	✓	✓
[5]	——	——	✓	✓

(5) に [1]〜[3] の例を挙げる。(B) のグロスが (A) のグロスの前に ‘cause to’ を付けたものである場合は、そのグロスを書いていない（例えば、*bárri bárri áss-a* ‘cause to become shocked’）。[3] で (C) は (B) の短い形式で意味は同じなので、グロスを付けていない（ただし、⑫を除く）。

(5) [1] ① (A) bárri bárri y-áa ‘become shocked’, (B) bárri bárri áss-a
② (A) bátti (bátti) y-áa ‘walk with stepping noise’, (B) bátti (bátti) áss-a
③ (A) bú’u bú’u y-áa ‘(about the heart) to beat’, (B) bú’u bú’u áss-a
④ (A) búkki y-áa ‘swell up’, (B) búkki áss-a
⑤ (A) dólli y-áa ‘lie down’, (B) dólli áss-a ‘lie down ((A) と同じ)’
⑥ (A) fárri y-áa ‘stretch one’s body backward’, (B) fárri áss-a
⑦ (A) garúǰi y-áa ‘become bored’, (B) garúǰi áss-a
⑧ (A) gótti y-áa ‘stand up’, (B) gótti áss-a
⑨ (A) heéšši y-áa ‘lower one’s body/head’, (B) heéšši áss-a
⑩ (A) hóssi y-áa ‘stand up straight’, (B) hóssi áss-a
⑪ (A) ǰálli y-áa ‘become numb’, (B) ǰálli áss-a
⑫ (A) k’úlli y-áa ‘think about, remember, come to mind’, (B) k’úlli áss-a
⑬ (A) šáa y-áa ‘produce the sound “šaa”’, (B) šáa áss-á
⑭ (A) šúmmi y-áa ‘become ground so that unnecessary parts can be removed; lose physical attractiveness’, (B) šúmmi áss-a
⑮ (A) úffi y-áa ‘blow with the sound “uffi”’, (B) úffi áss-a ‘blow something with the sound “uffi”’

[2] ① (A) háwwu y-áa ‘lose balance’, (B) háwwu áss-a, (D) háww-o ‘act of losing balance’
② (A) keléǰǰi y-áa ‘become inactive’, (B) keléǰǰi áss-a, (D) keléǰǰ-o ‘inactivity’
③ (A) k’ípp’i y-áa ‘make a gesture’, (B) k’ípp’i áss-a ‘make a gesture to someone’, (D) k’ipp’-eéssa ‘gesture’
④ (A) léčč’i y-áa ‘walk tiredly’, (B) léčč’i áss-a, (D) léčč’-o ‘tiredness’
⑤ (A) nággi y-áa ‘become larger’, (B) nággi áss-a, (D) nágg-o ‘becoming larger’
⑥ (A) ñámmi (ñámmi) y-áa ‘become tasty’, (B) ñámmi (ñámmi) áss-a, (D) ñámm-o ‘good taste’
⑦ (A) rútt’i y-áa ‘become startled’, (B) rútt’i áss-a, (D) rútt’-o ‘startle’
⑧ (A) sámmi y-áa ‘keep silent’, (B) sámmi áss-a, (D) sámm-o ‘silence’
⑨ (A) šáwwu y-áa ‘step aside, turn around’, (B) šáwwu áss-a, (D) šáww-o ‘act of stepping aside, turning around’
⑩ (A) šírri y-áa ‘slide’, (B) šírri áss-a, (D) šírr-o ‘act of sliding’
⑪ (A) šoróďďi y-áa ‘have an unpleasant tickling feeling’, (B) šoróďďi áss-a, (D) šoróďď-o ‘act of tickling’

[3] ① (A) baáǰǰi y-áa ‘walk aimlessly, talk uncontrollably’, (B) baáǰǰi áss-a, (C) baaǰǰ-ís-a, (D) baáǰǰ-o ‘act of walking aimlessly, act of talking uncontrollably’
② (A) bákk’i y-áa ‘wake up’, (B) bákk’i áss-a, (C) bakk’-eéss-a, (D) bákk’-o ‘act of waking up’
③ (A) bé’e y-áa ‘become surprised’, (B) bé’e áss-a, (C) be’-eéss-a, (D) bé’-o ‘becoming surprised’
④ (A) c’aákk’i y-áa ‘look back’, (B) c’aákk’i áss-a, (C) c’aakk’-ís-a, (D) c’aákk’-o ‘act of looking back’
⑤ (A) gámba y-áa ‘gather’, (B) gámba áss-a, (C) gamb-ís-a, (D) gámb-o ‘meeting’
⑥ (A) haráďďi y-áa ‘(e.g. roasted corn) to make a popping sound’, (B) haráďďi áss-a, (C) haraďď-ís-a, (D) haraďď-eéssa ‘popping noise’
⑦ (A) hat’átt’i y-áa ‘(e.g. paper) make a tearing noise’, (B) hat’átt’i áss-a, (C) hat’att’-eéss-a, (D) hat’att’-eéss-a ‘tearing noise’

⑧ (A) hékk'i (hékk'i) y-áa 'hiccup', (B) hékk'i (hékk'i) áss-a, (C) hekk'-ís-a, (D) hékk'-o 'hiccup', hekk'-eéssa '(continuous) hiccup'
⑨ (A) hurrúggi y-áa '(e.g. door) make a friction sound', (B) hurrúggi áss-a, (C) hurrugg-eéss-a, (D) hurrúgg-o 'friction sound'
⑩ (A) k'uútt'i y-áa 'hurry', (B) k'uútt'i áss-a, (C) k'uut'-eéss-a, (D) k'uútt'-o 'act of hurrying'
⑪ (A) lášši y-áa 'become calm', (B) lášši áss-a, (C) lašš-eéss-a, (D) lášš-o 'act of making someone calm'
⑫ (A) šíkk'i y-áa 'approach', (B) šíkk'i áss-a, (C) šík'-a 'approach', šíkk'-is-a, 'cause to approach' (D) šík'-o 'closeness'
⑬ (A) sumúu y-áa 'agree', (B) sumúu áss-a, (C) sum-iíss-a, (D) sum-óo 'agreement'
⑭ (A) tášši y-áa 'become satisfied', (B) tášši áss-a, (C) tašš-eéss-a, (D) tášš-o 'pleasure, satisfaction'

さらに [4] と [5] のパターンがあるが、[1]〜[3] とどのような関係があるのかはまだ検討する必要がある。[4] では、(B), (C), (D) はあるが、対応する (A) がない。[5] では、(C) と (D) は存在するが、(A) と (B) がない。(6) に [4] と [5] の例を挙げる。[4] で (C) は (B) の短い形式で意味は同じなので、グロスは付けていない。[5] で (C) に加えて自動詞があるものがある。以下で INTR として挙げている。

(6) [4] ① (B) giddé áss-a 'force someone to do ...', (C) gidd-eéss-a, (D) gídd-e 'enforcement'
② (B) hayyé áss-a 'sing a baby a lullaby', (C) hayy-eéss-a 'sing a baby a lullaby; give advice and prevent someone from doing something bad using figurative speech', (D) háyy-o 'figurative speech'
③ (B) odoó áss-a 'inform', (C) od-eéss-a, (D) od-óo 'information'
④ (B) wottó áss-a 'cause trouble to someone', (C) wott-eéss-a, (D) wótt-o 'trouble'
⑤ (B) woyyá áss-a 'cause to become better', (C) woyy-eéss-a (INTR: wóyy-a 'become better'), (D) wóyy-a 'improvement, recovery (also, ADJ: better)'
[5] ① (C) c'anc'aal-eéssa 'become talkative, become noisy because of crowdedness', (D) c'ánc'-o 'noise'
② (C) gang-eéss-a 'enclose, cause to move around' (INTR: gang-aáw-a 'move around'), (D) gang-aáw-a 'surrounding area'
③ (C) inj-eéss-a 'facilitate' (INTR: inj-áa 'become facilitated'), (D) ínj-o 'facilitation'
④ (C) k'itt'-eéss-a 'prepare' (INTR: k'itt'-aáw-a 'get ready'), (D) k'itt'-eéss-o 'preparation'
⑤ (C) sirñ-eéss-a 'oblige', (D) sírñ-o 'criticism toward someone about his/her past behavior'
⑥ (C) weedd-ís-a 'sing a song to praise someone who killed an enemy or animal', (D) weédd-o 'song for praising someone who killed an enemy or animal'

すべてが上のパターンのどれかを示すわけではなく、どれにも入らない (7) のような例も少ないがある。

(7) (a) (A) のみ：① umbáa y-áa '(about a cow) moo' / ② šenkéi y-áa '(about a cow) become large because of pregnancy'
(b) (B) のみ：① k'úrči (k'úrči) áss-a 'eat with a chewing noise' / ② gurč'ú'mi áss-a 'drink with a gulping noise'
(c) (C) のみ：① k'in-eéss-a 'arrange' (INTR: k'in-áa 'become arranged') / ② murr-ís-a 'criticize', murr-eéss-a 'cause to criticize'
(d) (B) と (D) のみ：(B) kilkíli áss-a 'tickle someone in the armpit', (D) kilkil-íččo 'armpit' (PL: kilkíl-la)
(e) (A) と (B) と (C) があるが、(D) がない：① (A) bárt'a y-áa 'bow down on a flat place', (B) bárt'a áss-a, (C) bart'-ís-a / ② (A) bášši y-áa 'become afraid', (B) bášši áss-a, (C) baššeéss-a
(f) (A) と (C) と (D) があるが、(B) がなく、(C) は使役の形態であるにもかかわらず自動詞：(A) uú'u y-áa 'shout', (C) uu'-í-s-a 'shout', (D) uu'eéssa 'act of shouting'
(g) (A) と (B) と (D) があるが、(C) が middle の形態で自動詞：(A) hint'íšši y-áa 'sneeze', (B) hint'íšši áss-a 'cause to sneeze', (C) hant'išš-í-'r-a 'sneeze', (D) hant'íšš-o 'sneezing'

4. シダーマ語の「言う」／「する」を表す動詞を使った慣用表現と関連した形式の歴史的発展に関する仮説

「言う」*y-áa* ／「する」*áss-a* を表す動詞を使った慣用表現の [1] のパターンは、(4) のような引用の用法、特に慣用化されていないイディオフォンの使用（以下で [0]）から発展したという仮説を立てることができる。第一に、擬音語の場合慣用化した X でも実際の音に似た音が使われていることが多く（例：(8)）、イディオフォンが慣用化したと考えられる。

(8)	íse	"[hiccup sound]"	y-i-t-e	hékk'i	y-i-t-inó.
	3SG.F.NOM	[hiccup sound]	say-EP-3SG.F-CVB	*hekk'i*	say-EP-3SG.F-D.PRF.3

'She hiccupped producing the [hiccup sound].'

第二に、擬音語から意味変化が起っていて、音以外の意味に使われるようになっているものがある。例えば、

(5)[1]⑮のように「特定の音を出す」という意味というより、「その音を出して行為を行なう」という意味になっているものがある。(3) の *bata bata y-áa/áss-a* は音以外の意味として、それぞれ‘lose balance; say different things at different times’/‘break something into pieces by applying force to it many times’がある。第三に、*y-áa/áss-a* の違いは、擬音語の場合はたいてい、[1] の段階であるにもかかわらず [0] における区別（例：(4)）と同じだが、「特定の音を出して行為を行なう」という意味になるにしたがって、擬音語の以外の表現のように、他動性の区別へと変化したと考えられるものがある（例：(5)[1]②）。

さらに、[2] や [3] が [1] から発展したという仮説を立てることができる。一部の話者しか使わない（十分慣用化されていない） (A) と (B) があるが、その場合たいてい [2] や [3] ではなく [1] のパターンを取る。例えば、アムハラ語の語から造られた (9) の形式は主に都市部の若者によって使われる表現である。(9) で X はアムハラ語の X に i を付けた形式のようである。

(9) [1] ① (A) k’ássi y-áa ‘become slow’, (B) k’ássi áss-a < AMH: k’äss alä ‘be/become slow’
② (A) k’átt’i y-áa ‘move straight; become upright; stop suddenly’, (B) k’átt’i áss-a ‘cause to become upright; cause to stop suddenly’ < AMH: k’ät’t’ alä ‘be straight; stop suddenly’ （筆者の表記法では k’ätt’ alä）
③ (A) aráffi y-áa ‘take a rest’, (B) aráffi áss-a < AMH: aräff alä ‘take a rest’

また、[2] と [3] の過程が漸次的な移行であることは、[3] のパターンを取るが、(B) に比べて (C) があまり使われない (10) のような例が存在することが示唆している。

(10) ① (A) šémbe y-áa ‘become overloaded’, (B) šémbe áss-a, (C) šemb-eéss-a, (D) šémb-o ‘load’
② (A) šíbbi y-áa ‘(about facial expression) becomes stiff because of anger or sadness’, (B) šíbbi áss-a, (C) šibb-eéss-a, (D) šíbb-o ‘stiff facial expression’
③ (A) šílli y-áa ‘(about teeth) make a grinding noise’, (B) šílli áss-a, (C) šill-eéss-a, (D) šíll-o ‘griding noise’

それから、[4] や [5] が [1] 〜[3] から発展したという仮説を立てることができる。第一に、前述の通り、(B) の縮約形の語の終わりの部分（*-eess* または *-is*）が使役の接尾辞 *-s* に形式が似ている。第二に、前述の通り、この慣用表現は「言う」／「する」を表す動詞が副動詞で使われることが多い。3 人称単数男性および 1 人称単数の副動詞の形式は、(4) にあるようにそれぞれ *y-ø-e* (say-3SG.M/1SG-CVB)/*ass-ø-e* (do-3SG.M/1SG-CVB) であり、X についた際の形式（X *y-ø-e*/X *ass-ø-e*）が、自動詞と自動詞から使役の接尾辞の付加により形成された他動詞の副動詞の形式と類似している：V-*ø-e* (V-3SG.M/1SG-CVB)/V-*i-s-ø-e* (V-EP-CAUS-3SG.M/1SG-CVB)。第三に、音を伴う生理現象や動物の鳴き声を表す動詞で、実際の音に類似したもの（例：(11), (12)）があり、もともと *y-áa/áss-a* を伴った形式であったのではないかと推測することができる。

(11)	íse	“[sneeze sound]”	y-i-t-e	hant’iššiď-ď-inó.
	3SG.F.NOM	[sneeze sound]	say-EP-3SG.F-CVB	sneeze-3SG.F-D.PRF.3
	‘She sneezed producing the [sneeze sound].’			
(12)	farášš-u	“hihiin”	y-ø-e	himimmis-ø-inó.
	horse-NOM.M	*hihiin*	say-3SG.M-CVB	neigh-3SG.M-D.PRF.3
	‘A horse neighed producing the sound “hihiin”.’			

さらには、Cohen et al. (2002) でシダーマ語の周辺の言語で「言う」／「する」を表す動詞を使った慣用表現から「言う」／「する」が文法化により接尾辞になった事例が報告されている。

ところが、[4] や [5] が [1] 〜[3] から発展したという仮説は検討の余地がある。まず、[4] や [5] の例はあまり多く見つかっていない。さらに、[1] 〜[3] の X は後ろから 2 番目の母音に高いピッチが起るが、(7) にある [4] のパターンで (B) における「する」を表す動詞の前の語は、一番最後の母音に高いピッチが起っている。一番最後の母音に高いピッチが起る形式には名詞の対格・斜格があり、[4] では X が文字通りの「する」という意味で使われている *áss-a* の目的語になっていると分析できる。実際、(7) のどの X も *áss-a* の受動態の形式 *ass-ám-a* の主語になることができる（ただし、(7)[4]② (D) *háyy-o* は *ass-ám-a* の主語にならない）。したがって、この段階ではもはや (B) は「する」を使った慣用表現ではないということになるので、[3] から発展したのかどうか定かではない。

5. シダーマ語の「言う」／「する」を使った表現の慣用化と文法的特徴の変化　以上から、シダーマ語の「言う」*y-áa*／「する」*áss-a* を使った表現はもともと [0] の段階の引用の構文（引用されたものはイディオフォンかもしれない）から発展し、慣用化が進むにつれて脱イディオフォン化されて、名詞が派生されるようになり、短い形式の動詞が造られたという仮説を立てることができる。（さらには、ことによると、その後「言う」／「する」の動詞を使わないようになったのかもしれない。）

表現性という点では、X は擬音の場合 [0] で非言語音を引用として使うことが可能であるが [1]〜[3] ではシダーマ語の音韻体系に合う音でなければならないという点で表現性が失われたという程度である。[0] と

[1]〜[3] のどちらでも X が繰り返されることがある。[1]〜[3] においては、[3] で (C) の X が繰り返されることがないということを除いては、表現性に変化はない。

Dingemanse & Akita (2016) と Dingemanse (in press) の言う形態統語的統合という意味での文法への統合という点でも、[0] と [1]〜[3] で大きくは違わない。どちらにおいても *y-áa/áss-a* は副動詞の形態を取り、X *y-áa/áss-a* が全体として副詞的に使われることが多い。また、[0] と [1]〜[3] のどちらにおいても X を分裂構文の焦点として使うことはできない。ただし、「... はどんな音を出したか？」という質問に対し、[1]〜[3] では不可能であるが、[0] では X のみで答えることが可能である（ただし、*y-áa/áss-a* を伴った方が容認度が高い）。この点においては [0] でよりも [1]〜[3] での方が X と *y-áa/áss-a* の形態統語的統合の度合いが強いと言える。[1]〜[3] の発展においては、[3] で (C) は X *y-áa/áss-a* が一つの動詞になっていて形態統語的統合の度合いが強い。

しかし文法のシステムへの統合という点では [0] や [1] から [2]、[3] に発展するにつれて大きな変化が見られる。X が [0] において引用に使われているときは、X として様々なタイプの言語的構成素（文、句、語、語の場合、様々な品詞）だけでなく非言語音も起こり得る。[1]〜[3] においては、一形態素から成り、高いピッチが後ろから 2 番目の母音に起る X は必ずその後に *y-áa/áss-a* が来て、他の表現では通常使われず、屈折変化をしないので、どの品詞とも違う振る舞いをし、独立した品詞として形態統語的に一貫した行動を示す。そして、生産的ではないが、X が派生に、そして X と *y-áa/áss-a* が語形成のプロセスにかかわるようになる。さらには、*y-áa* と *áss-a* の違いは [0] では音の出方と主語の種類に基づいているが、慣用化されるにつれて他動性による区別になるという違いがある。Dingemanse (in press) はその題名にある system integration をイディオフォンのシステムにおける形態統語的統合という意味で使っているが、「文法のシステムへの統合」という別の意味での system integration が起る。シダーマ語のデータから、脱イディオフォン化により文法のシステムへの統合がなされるということがわかる。

6. 結論　シダーマ語の「言う」*y-áa* ／「する」*áss-a* を表す動詞を使った慣用表現と関連した形式のパターンのデータから、これらは（少なくともあるものは [0] から ）[1]〜[3] の発展をして来たという仮説を提示した。さらに、これらの表現の発展の過程で表現性が少し失われ、形態統語的統合がやや強くなったと言えるが、あまり大きな違いではない。さらに、表現性と形態統語的統合の変化は必ずしも同時に段々と起こっているわけではないので、完全な反比例の関係にあるとは言い難い。しかしもっと重要なことに、X が独立した品詞として文法のシステムに統合されていると言える。これは他の多くの言語でも見られるパターンであるかもしれないと推測できる。残る疑問の一つは、「言う」／「する」を使った表現が擬音語でない場合、必ず [0] でイディオフォンであったものから意味が発展して来たものなのか、あるいは [1] の段階から突然使われるのか、その具体的な過程はどのようなものであるかという点である。

略号一覧　ACCOBL: accusative-oblique, ADJ: adjective, AMH: Amharic, CAUS: causative, CVB: converb, D.PRF: distant perfect, EP: epenthesis, INF: infinitive, INTR: intransitive, LV: lengthened vowel, MID: middle, NOM: nominative, POSS: possessive, R.PRF: recent perfect

謝辞　シダーマ母語話者の調査協力者 Iyasu Gudura 氏、Legesse Gudura 氏、Genene Gudura 氏に感謝を申し上げる。本研究は、以下の研究補助金により可能になった：科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究課題番号：24520490、基盤研究 (B) 研究課題番号 15H05157（研究代表者：河内一博）、基盤研究 (B) 研究課題番号：15H03206（研究代表者：松本曜）、基盤研究 (A) 研究課題番号：16H01928（研究代表者：今井むつみ）、National Science Foundation 研究課題番号：BCS-1535846（研究代表者：Jürgen Bohnemeyer）。また、アムハラ語、ウォライタ語、カンバタ語に関する情報を提供して下さった若狭基道氏に感謝を申し上げたい。本研究は、2016 年 5 月 15 日に名古屋大学東京オフィスで行われた「言語記号が（非）恣意的である理由と利点」研究会で「Sidaama 語のイディオム」というタイトルでデータを紹介した発表から発展した。コメントをくださった参加者（今井むつみ氏、秋田喜美氏、佐治伸郎氏）にお礼を申し上げたい。Pear Film のビデオ・ファイルは Mary Erbaugh 氏による。

引用文献　(i) Cohen, David, Marie-Claude Simeone-Senelle, Martine Vanhove. 2002. The grammaticalization of ‘say’ and ‘do’: An areal phenomenon in East Africa. In Güldemann, Tom, and Manfred von Rocador. eds. *Reported Discourse: a Meeting Ground for Different Linguistic Domains*, 227-251. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. (ii) Dingemanse, Mark. in press. Expressiveness and system integration: On the typology of ideophones, with special reference to Siwu. *STUF - Language Typology and Universals.* (iii) Dingemanse, Mark, and Kimi Akita. 2016. An inverse relation between expressiveness and grammatical integration: On the morphosyntactic typology of ideophones, with special reference to Japanese. *Journal of Linguistics* (First view). (iv) Ferguson, Charles. 1970. The Ethiopian Language Area. *Journal of Ethiopian Studies*, 8.2, 67-80.

D-2

クリック子音体系の言語獲得：グイ語事例研究

中川裕

1. はじめに

クリック子音音素は非クリック子音音素に比べて、通言語的な頻度が低く、複雑な構造の調音をもつ。この意味で、クリック子音音素は非クリック音素よりも「有標」だと言える。クリック子音音素がその音韻構造を特徴づける最大の言語群であるコイサン諸語においては、すべての言語がクリック子音音素を持ち、しかも、クリック子音目録が非クリック子音目録よりも大きい言語が多い (Vossen 2012)。また、クリック子音数が約50から約80という大きなクリック子音目録を持つ言語もめずらしくない。さらに、コイサン諸語においては、非クリック子音よりもクリック子音の語彙内頻度が高い(Güldemann & Nakagawa 2013)。つまり、「無標」の非クリック音類よりも、「有標」のクリック音類の方が語彙内頻度が高いという奇妙な事実が認められる。

語彙頻度が高い「有標」の音類であるコイサン諸語のクリック子音音素を、幼児は一体どのように獲得するのだろうか？本研究はこの問題に取り組む。従来の言語獲得調査でコイサン音韻論が対象となったことはない。コイサン言語学でも幼児の音韻論の報告がなされたことはない。本研究は、コイサン諸語コエ・クワディ語族のグイ語を話す幼児を対象とした現地調査に基づき、コイサン語におけるクリック子音音素の獲得過程に関する初の研究成果を報告する。

2. 分析の対象とする資料

・グイ語モノリンガルの４歳男児2人の発音の観察
・クリック子音を語頭に持つ2音節単語x199語
・ボツワナ共和国ハンシー県コエンサケネ集落（1997年7月）
・その後2人は問題なくグイ語の発音を獲得

3. 幼児の発音における脱クリック化とクリック調音獲得

グイ語は52種類のクリック音素をもつ。それらは4種類の流入音タイプ (ǀ ǂ ! ǁ) と13種類の系列で体系的に分類できる。表1は、その分類によるグイ語クリック子音体系(左側)と調査で観察された幼児のクリック獲得途上の発音の要約(右側)とを示している。

調査の結果、幼児の発音には

(1)クリック子音の非クリック子音による代用 (脱クリック化)

(2)代用されない場合はクリック流入音における調音の安定性の変異

が観察された。(1)の代用はクリック音素を構成する調音的特徴の部分からなるもので、そこには規則的なパタンが観察された。(2)の調音上の安定性には流入音タイプにより異なるパタンが観察された。

表1　グイ語のクリック子音体系と幼児のクリック子音獲得パタン（5, 6, 7番の幼児の列の***C***は変異を見せるクリック流入音を表す）

系列	流入音タイプ 歯	硬口蓋	歯茎	側面	幼児	代用の種類
1.無声無気音	ǀ	ǂ	!	ǁ	k	前方閉鎖消失 喉頭素性保持
2.有声音	gǀ	gǂ	g!	gǁ	g	
3.有気音	ǀʰ	ǂʰ	!ʰ	ǁʰ	kʰ	
4.放出音	ǀ’	ǂ’	!’	ǁ’	k’	
5.鼻音	ŋǀ	ŋǂ	ŋ!	ŋǁ	ŋ***C***	代用なし
6.声門閉鎖音	ǀʔ	ǂʔ	!ʔ	ǁʔ	***C***ʔ	
7.声門摩擦音	ǀh	ǂh	!h	ǁh	***C***h	
8.口蓋垂摩擦音	ǀχ	ǂχ	!χ	ǁχ	kχ	前方閉鎖消失 口蓋垂音保持
9.口蓋垂破擦放出音	ǀqχ’	ǂqχ’	!qχ’	ǁqχ’	kqχ’	
10.口蓋垂無声無気	ǀq	ǂq	!q	ǁq	q	クリック消失 口蓋垂音保持
11.口蓋垂有声音	ǀɢ	ǂɢ	!ɢ	ǁɢ	ɢ	
12.口蓋垂有気音	ǀqʰ	ǂqʰ	!qʰ	ǁqʰ	qʰ	
13.口蓋垂放出音	ǀq’	ǂq’	!q’	ǁq’	q’	

3.1. 代用のパタンの規則性

代用のパタンから、13種類の系列には次の4クラスが認められた。

(i)代用のない系列（表1の5, 6, 7番）

(ii)前方閉鎖消失・喉頭素性保持の代用を示す系列（1, 2, 3, 4番）

(iii)前方閉鎖消失・口蓋垂音保持の代用を示す系列（8, 9番）

(iv)クリック消失・口蓋垂音保持の代用を示す系列（10, 11, 12, 13番）

3.2. 13系列間の獲得順序

非クリック子音で代用される系列 1-4, 8-13と、代用されない系列5, 6, 7との間には、クリック獲得の順序から次のような階層性が認められる：**{系列5, 6, 7} > {その他の系列}**。

だが、獲得順序の早い系列5, 6, 7には、共通する弁別的素性はない。したがって、弁別的素性だけを用いる限りは、系列5, 6, 7は恣意的組合せとなり、このクラスを捉えられない。この3系列(5鼻音 & 6声門閉鎖音 & 7声門摩擦音)から成る音類は、どのように理解すればいいのだろうか？弁別素性にはないが音声詳細として、6番と7番には鼻音性が通コイサン的に認められる（e.g. グイ語、コン語、ジュー語、コエコエ語、 cf. Nakagawa 1996, Ladefoged & Maddieson 1996)。また、5番はそもそも鼻音性が弁別的素性である。そして、この5, 6, 7に共通する音声的特徴としての鼻音性は他の系列には認められない。従って、この2人の幼児のクリック獲得は音声的に鼻音性を持つ系列から始まったと理解することができ、先のクリック獲得の順序による階層性は次のように書き換えることができる：

{鼻音性系列5, 6, 7} > {非鼻音性系列}

3.3. 流入音タイプ間の調音的安定性の階層

幼児が発音した系列5, 6, 7のクリック子音は、大人のそれらに比べると、クリック流入音の調音に決定的な不安定さが観察された。そしてその不安定さには、流入音タイプによって程度の違いがあった。大まかに言うと、調音の安定性は次のような階層性を示した：

! > {ǂ ǀ} > ǁ

表2　系列5, 6, 7のクリック子音との幼児のクリックに観察される流入音の変異（C*はCに類似の音、Ç̩は弱い調音のC、Čは短いCを表す）

	ǀ	ǂ	!	ǁ
5.鼻音	ŋǀ	ŋǂ	ŋ!	ŋǁ
6.声門閉鎖音	ǀʔ	ǂʔ	!ʔ	ǁʔ
7.声門摩擦音	ǀh	ǂh	!h	ǁh
幼児の流入音	ǀ ～ ǀ̩ ～ ǂ̩* ～ ǂ*	ǂ ～ ǂ̩ ～ !*	!	ǁ ～ ǁ̩ ～ ǁ̩̆ ～ ǁ̆～ !
調音的安定性	比較的**不安定**	比較的**安定**	**安定**	**不安定**

表3　4つのクリック流入音タイプの調音的特徴（簡略的調音点特徴と2つの調音法特徴）

	ǀ	ǂ	!	ǁ
調音点	歯	硬口蓋	歯茎	歯茎
側面性	–	–	–	+
破擦性	+	–	–	+

流入音!は最も安定し、‖は最も不安定であった。ǂと|はその中間に当たる。

表2は、系列5, 6, 7の幼児の発音におけるそれぞれのクリック流入音の変異と、そこから判断されるそれぞれの調音的安定性を示している。流入音の変異の詳細を観察すると、相対的にはǂの方が|よりも比較的安定していることがわかる。したがって、4つの流入音タイプの間の階層性は次のように敷衍できる：

! > ǂ > | > ‖

このクリック流入音の調音獲得における階層性はどのように説明できるだろうか？

表3は、4つの流入音タイプがそもそも持つ調音的な特徴を簡略的に要約している。これらの特徴を考慮すると、安定性の高い2つの流入音[!]と[ǂ]は、調音法特徴の側面性・破擦性の両方を欠くという意味で単純な調音だと言うことができる。また、最も不安定な流入音[‖]は、側面性・破擦性の両方を持つという意味で、他の3つの流入音よりも複雑な調音だと言うことができる。

流入音[!]と[ǂ]は、調音法の点では同程度に単純だが、安定性に差が認められる。その理由は、おそらく調音点の違いに求めることができるだろうが、幼児がなぜ[!]の調音点を[ǂ]のそれよりも早く安定的に発音するようになったかは、[alveolar] vs. [palatal]という上顎側の調音点の違いと同時に、[apical] vs. [laminal]という舌先の構えの調音点の違いの考慮も含め、今後の考察が必要な課題である。

引用文献

Güldemann, T. and H. Nakagawa (2013) Khoisan sound systems in typological perspective, Phonetics and Phonology of Sub-Saharan Languages, University of the Witwatersrand, Johannesburg.

Ladefoged, P. and I. Maddieson (1996) *The Sounds of the World's Languages*, Blackwell.

Nakagawa, H. (1996) A first report on the click accompaniments of |Gui, *Journal of the International Phonetic Association*, 26: 41-56.

Vossen, R. (ed.). (2012) *Khoisan Languages*. Routledge.

謝辞

この研究はJSPS科研費16H01925, 25300029の助成を受けている。

D-3　ランバ語の 2 種類の Anterior－*-li*-VR-*ile* 形式と*-aa*-VR-*a* 形式－[1]

大阪大学大学院言語文化研究科 / 日本学術振興会特別研究員 DC2 (yukatan_0118@yahoo.co.jp)
牧野友香

はじめに

ランバ語はニジェール・コンゴ語族バントゥ諸語のひとつであり、ザンビアのコッパーベルト州と、北で国境を接しているコンゴ民主共和国の上カタンガ (Haut-Katanga) 州で話されている。話者数は 198,000 人いるとされている (https://www.ethnologue.com/language/lam)。膠着型の言語で、以下のように動詞語根に接辞が連結して動詞が構成される。□で囲った要素は必須で、( ) 内の要素は任意である。

＜ランバ語の動詞構造＞

(前主語接辞)－主語接辞－時制接辞－(目的語接辞)－動詞語根－(派生接辞)－末尾辞

Anterior とは、主に動作動詞とともに用いられる場合は現在の状況と関連のある過去の事象を表し、状態動詞と用いられる場合は過去に起こった状況が現在にまで続いていることを表す(Nurse 2007:165)[2]。ランバ語には Anterior を表していると考えられる形式が 2 種類ある。本発表では、両形式の意味と機能を比較、検討する。さらに、*-aa*-VR-*a* 形式が動詞によって共起が制限されるので、この要因も検討する。

1. 先行研究の記述

ランバ語のテンス・アスペクトは、時制接辞と末尾辞の組み合わせによって決定される。時制接辞-*li*-と末尾辞-*ile* の組み合わせによって表される形式 (-*li*-VR-*ile* 形式) は、Perfect (完了形)と呼ばれている。これは、「発話時に完全にその状態になっていることを表す」 (Doke & Litt 1938:258-259)、「ある行為が既に行われたことを表す」(湯川 1995:144) と説明されている。発話時に先行して事象が起こっていることが表されていることから、Anterior の一種だと考えられる。

(1)　a-**lí**-li-**ile**
　　3sgSM-PAST-eat-ANT1[3]
　　「彼はもう食べた」　(湯川 1995:145、グロスは発表者による。引用については以下同。)

次に、時制接辞-*aa*-と末尾辞-*a* の組み合わせによって表される形式 (-*aa*-VR-*a* 形式) は Immediate Past Indefinite (不定のたった今の過去形) と呼ばれており、Doke & Litt (1938) はこの形式を発話時と同じ日に起こった行動を表し、さらに動詞によっては現在の状況を表すこともあると述べている (Doke & Litt 1938:261)。

(2)　n-**áá**-ly**a**
　　1sgSM-ANT2-eat.F
　　「私は食べた」　(湯川 1995:142)

---

[1] 本研究は、2016 年度科学研究費基盤研究 (C)「ニジェール・コンゴ語族における動詞構造の形態・統語論比較研究」代表：小森淳子 (研究課題番号：16K02672) の助成を受けて、2016 年 12 月から 2017 年 2 月にかけてザンビア北部コッパーベルト州の州都ンドラで行った。

[2] Bybee et al. (1994) は前者のみを Anterior とし、後者を Resultative と呼んでいる (Bybee et al. 1994:68-69)。

[3] ランバ語にはほかのバントゥ諸語と同様に「名詞クラス」と呼ばれる名詞の分類があり、名詞は 18 種類のグループに分けられる。名詞接頭辞には、冒頭母音が名詞接頭辞と同じ母音で現れる。主語接辞、目的語接辞、名詞修飾語は、それぞれ名詞に呼応した形で現れる。例文のグロスで名詞の前に示している数字は、その名詞が属する名詞クラスを表し、名詞以外についている数字は呼応している名詞が属する名詞クラスを表す。主語接辞と目的語接辞は人称 (単数は sg、複数は pl) またはクラス番号で表す。時制接辞はその時制の種類を表す。

Nurse (2008) はこの-*aa*-VR-*a* 形式の意味についての Doke & Litt (1938) の分析は不透明であると述べている (Nurse 2008:156)。しかしながら、以下で挙げる今回発表者が新たに集めたデータでは、-*aa*-VR-*a* 形式が先行して起こった事象と発話時を関連付けていることから、この形式も Anterior の一種であると考えられる。

2. 両形式の比較

以下、両形式が用いられる例を挙げ、それぞれの意味と機能を考察する。なお、引用する例は特に断りがない限り発表者が母語話者[4]へインタビュー形式で聞き取り調査し採取したものである。

(3) a. n-**di**[5]-is-**ile** kú-kansenshi
1sgSM-PAST-come-ANT1 17NP-Kansenshi (地名)
「私は (すでに) カンセンシに来ている」(待ち合わせている相手に対して)

b. n-**aa**-ís-**a** kú-kansenshi
1sgSM-ANT2 -come-F 17NP-Kansenshi
「私はカンセンシに来た」

(4) a. í-chuuni chi-**lí-leele**[6]
AV-7NP.bird 7SM-PAST -sleep.ANT1
「鳥は寝ている」

b. ch**aa**-laal-**á** bukúúmo
7SM.ANT2-sleep-F just.now
「(鳥は) ついさっき寝た」(「鳥はいつ寝たのか？」という問いに対して)

(3) は動詞-*is*-「来る」を使った例である。-*li*-VR-*ile* 形式を使った(3a)では、「私」が発話が行われている地点に発話時よりも前に到着し、その結果の状態が継続していることを表している。一方で-*aa*-VR-*a* 形式の (3b) は、「私」が発話が行われている地点 (ここではカンセンシ) に発話時以前に到着したことが表されているが、ここでは到着がまだだであった状態から到着したという状況の変化が前面に表されている。(4) は-*laal*-「寝入る」を使った例である。(4a) の-*li*-VR-*ile* を用いた例は、「鳥」が単に眠っている状態であることを表している。一方で-*aa*-VR-*a* 形式を用いた (4b) は、寝ていなかった状態から寝入った状態への変化を表している。(4a) と (4b) のどちらも「寝入る」という事象が発話時 (≒現在) よりも先行して起こっており、その状態が発話時まで続いていることは共通している。-*li*-VR-*ile* 形式を用いた (4a) では寝ていない状態から寝入った状態へと変化したことよりもその後寝入った状態が続いていることを前面に表しているのに対して、-*aa*-VR-*a* 形式を用いた (4b) では、継続性よりも、寝ていない状態から寝入った状態への変化を前面に表している。

(4a) のような、事象が起きたことによって状態が変化したということよりも、変化後の結果状態が継続していることに重きを置く表現は、工藤 (1995) の、「先行の運動性を切り捨ててしまった」がために、「ただの状態」を表

---

[4] Eunice Mukuka 氏。1948 年生まれの女性である。ザンビアの北部に位置するコッパーベルト州の州都ンドラ中心部から南に2kmほど離れた地域で生まれ、現在は中心部から北西に4kmほど離れた地域に住んでいる。大学まで教育を受けており、教育媒介言語は小学校から英語である。幼少期の家庭内言語はランバ語であるが、結婚後は必要に応じてこの地域の有力言語であるベンバ語も話している。ランバ語とベンバ語と以外に英語も話す。

[5] -*di*-は-*li*-の異形態であり、鼻音に後続する場合に l が d となるために起こるものである。

[6] -*laal*-「寝入る」は、末尾辞-*ile* を取る際にインブリケーションという現象を起こすため、-*laalile* とはならない。-*laal*-の語根末の母音 *a* の後ろに-*ile* のうちの *i* が挿入され、*a* と *i* が母音融合を起こして *e* となる (Doke 1922:9)。語根末の子音 *l* は-*ile* のうちの *l* と交替し、さらに語尾に-*e* が付き、-*leele* となる。

すようになる現象 (工藤 1995:125) と類似するものと考えられる。*-laal-*「寝る」以外にも同じような現象を起こす動詞としては、例えば*-um-*「乾く」がある。*-um-*「乾く」を*-li-*VR-*ile* と共起させたのが以下の (5) であり、単に乾いている状態が表されている。

(5) í-nika i-**ly**úum-**ine**[7]
AV-9NP.river 9SM-PAST.dry-ANT1
「川は乾いている」

一方、*-um-*「乾く」を*-aa-*VR-*a* 形式と共起させた例が以下の (6) である。

(6) iyí í-nika yaa-lí lukóso bwinó, panó uyú mwaká
9 この AV-9NP.river 9SM.ANT2-be just well CNJC 3 この 3NP-year
jáá-um-**a**
9SM.ANT2-dry-F
「この川は (去年は) 良かったが、今年は乾いている」

工藤 (1995) は、「以前の変化そのものを直接的にとらえたとき」、つまり、この例で言うと乾いていなかった状態から乾いた状態への変化を前面的に捉えた際に、変化の成立時点 (工藤 (1995) では「変化 (運動) 成立時点」(工藤 1995:120)) と共起できるようになると述べている (工藤 1995:120)。(6) のように*-aa-*VR-*a* 形式と変化の成立時点 *uyu mwaka*「今年」が共起可能であることは、先行して起こった「乾く」という事象の結果状態が継続していることよりも、前年の乾いていなかった状態から乾いた状態へと変化したという情報の方が前面に出されていることを示すものだと考えられる。また、以下は*-katal-*「疲れる」と*-aa-*VR-*a* を共起させた例である。(6) と同じように時間副詞 *leelo*「今日」を共起させた (7a) が成り立つのに対し、(7b) のように *ukufuma*「～から」を使って継続性に重きを置いて表そうとすると非文となる。

(7) a. í-n-dume yanjí yaachi-pyúng-a i-mi-límo neemakósa leeló,
AV-9NP-brother 9my 9SM.HOD-do-F AV-4NP-work very today
kánshi y**áá-**katal-**a** leelo
so 9SM.ANT2-get tired-F today
「私の弟は今日一生懸命働いたので、今日は疲れている」

b. *í-n-dume yanjí yaachi-pyúng-a i-mi-límo neemakósa leeló,
AV-9NP-brother 9my 9SM.HOD-do-F AV-4NP-work very today
kánshi y**áá-**katal-**a** u-kú-fuma leelo
so 9SM.ANT2-get tired-F AV-15NP-come from today
(intd. 私の弟は今日一生懸命働いたので、今日からずっと疲れている)

3. *-aa-*VR-*a* 形式と動詞が持つ性質の関わり

3.1. 永続的な状態を表す状態動詞との相性

*-aa-*VR-*a* 形式が変化の成立時点に着目した形式であることを主張する根拠として、*-pala*「似る」が (8a) のように*-aa-*VR-*a* 形式と共起できないことが挙げられる。*-pala*「似る」は、以下の (8b) ように*-li-*VR-*ile* 形式のみをとる。

[7] 動詞語根に鼻音が含まれている場合、鼻音調和を起こし *l* が *n* に変化する。

(8) a. *n-**áá**-pal-**a** báá-taata
1sgSM-ANT2-resemble-F HON-father
b. n-**dí**-pal-**ile** báá-taata
1sgSM-PAST-resemble-ANT1 HON-father
「私は父に似ている」

これは、「似る」という事象の成立前後の区別がしにくいことが関係していると思われる。「似る」という事象は生まれた時点ですでに成立しており、永続的なものであると経験的には考えられる。そのため、*-li*-VR-*ile* 形式によって (5) で挙げた例と同じように*-li*-VR-*ile* 形式によってただの状態が表されていると考えられる。ザンビアの西部州で話されている同じくバントゥ諸語のひとつであるトテラ語にも、同様の意味を表す*-a*-VR-*a* 形式がある[8]が、この形式も永続的な状態を表す動詞とは共起しにくいことが述べられている (Crane 2012:121)、ランバ語においても同じ要因が関係している可能性がある。

3.2. *-aa*-VR-*a* 形式と動作動詞との相性

-aa-VR-*a* 形式は、すでに述べたように、Doke (1922) や湯川 (1995) では Immediate Past「たった今の過去形」(Doke 1922:63、湯川 1995:144) と呼ばれている。Bybee et al. (1994) は、Anterior が動作動詞と共起した場合、結果状態の継続性を表さずに発話時との関連性のみが重視されるようになり、やがてはその関連性すらも軽視されて、単に発話時と同じ日に起きたことを表すようになることがあると述べている (Bybee et al. 1994:86-87)。トテラ語の*-a*-VR-*a* 形式においても、同様の現象が起こっており、動作動詞と共起した場合には単純に発話時と同じ日に起こった行動が表される (Crane 2012:121)。

(9) トテラ語
nd**a**-neng-**a** 「私は踊った」
1sg.ANT2-dance-F (Crane 2011:122)

トテラ語の*-a*-VR-*a* 形式については、動作動詞との共起が制限されるといった報告はされていない (Crane 2011:119-122)。しかしながらランバ語の場合、*-aa*-VR-*a* 形式はトテラ語の*-a*-VR-*a* 形式とほぼ同じ意味を表しているにも拘わらず、動作動詞と共起する場合いくつか制約が課される。*-imb-*「歌う」でそれを示す。まず、以下の (10) のように、「踊ったのか？」という問いに対して「踊ったのではなく歌ったのだ」と答える文脈においては、つまり動詞自体に焦点を当てる場合には、*-aa*-VR-*a* 形式を用いることはできない。以下の (10) ように今日の過去を表す*-aachi*-VR-*a* 形式を用いて答えることになる。

(10) kóóku, n-**aachí**mb-**a**
No 1sgSM-HOD.sing-F
「いいえ、歌いました」(「踊ったのか？」という質問に対して)

さらに、以下のように「何をしたの？」という問いに対しても、*-aa*-VR-*a* 形式を用いると非文となるため、以下の (11) のように過去進行形を用いることで自然な対話が成立させることになる。

(11) n-**aa**-**lú**-**ku**-imb-**a**
1sgSM-ANT2-be.AV-15NP-sing-F
「私は歌っていた」(「何をしたの？」という問いに対して)

---

[8] Crane (2011) はこれを Completive と呼んでいる (Crane 2011)。

(10)、(11) の例から、*-aa*-VR-*a* 形式は歌うことが前提になっている文脈でのみ現れるものと考えられる。

しかしながら、歌うことが前提になっていても、以下の (12) ように「何を歌ったのか」という問いに対して答える場合、つまり後続語に焦点が当たっている場合は*-aa*-VR-*a* 形式を用いると非文となり、*-aachi*-VR-*a* 形式が用いられる。対して (13) のように単に「歌 (a song) を歌ったのか」と問われた場合の答えとしては*-aa*-VR-*a* 形式が問題なく用いられる。

(12) n-**aachí**mb-**a** Glególian
1sgSM-HOD.sing-F Gregorian
「私はグレゴリアン聖歌を歌った」(「何の歌を歌ったのか？」という問いに対して)

(13) n-**aa**-imb-**á** ú-lu-imbo
1sgSM-ANT2-sing-F AV-11NP-song
「私は歌を歌った」(「歌 (a song) を歌ったのか？」という問いに対して)

以上のことから、動詞自体と後続語に焦点が当たらない場合に、*-aa*-VR-*a* 形式は動作動詞と共起できると言える。ただし、*-pashil*-「縫う」の場合、以下の (14) ように「何をしたの？」という問いに対する答えとして*-aa*-VR-*a* 形式を用いても非文にはならない。(1)、(2) で挙げた*-li*-食べるも同様である。

(14) n-**áá**-pashil-**á** **í**-tumba
1sgSM-ANT2-sew-F 5NP-bag
「私はカバンを縫った」(「何をしたの？」という問いに対して)

-aa-VR-*a* 形式が変化の成立点を前面に表すために、変化を示さない動詞とは相性が悪いことは (8) ですでに述べたとおりであるが、(14) の*-pashil*-「縫う」や (1)、(2) の*-li*-「食べる」は、変化を示す動詞とは言い難い。しかしながら、どちらも後続語に対して何らかの影響を与える動詞だと言える。つまり、*-aa*-VR-*a* 形式は変化に限らず何らかの働きかけを示す動詞と相性が良いものだと考えられる。働きかけを示さない-imb-「歌う」のような動作動詞と共起する場合にのみ、情報構造による制約が課されるのかもしれない。今後さらなる検討が必要である。

4. 両方の動詞と共起しない特殊な動詞の例

例えば*-fwai*-「欲する」は、*-aa*-VR-*a* 形式を用いると (15a) で示すように非常に不自然な文となり、*-li*-VR-*ile* 形式は (15b) で示すように全く共起できない。動作主が発話時に何かを欲している状況を表したい場合、(15c) のように現在進行形を用いる。

(15) a. ???n-**áá**-fway**a** íchi i-chí-seepo
1sgSM-ANT2-want.F 7 この AV-7NP-fruit
「(ずっと欲しがっていたものが見つかって) この果物が欲しかった」

b. *n-**dí**-fwai-**ile** íchi i-chí-seepo
1sgSM-PAST-want-ANT1 7 この AV-7NP-fruit
(int. 私はずっとこの果物を欲しがっている)

c. n-**dúku**-fway**a** íchi i-chí-seepo
3sgSM-be.15NP-want.F 7 この AV-NP-fruit
「私は果物が欲しい」

まとめと今後の課題

-aa-VR-*a* 形式と*-li*-VR-*ile* 形式のどちらも、動詞の表す事象が先行して起こり、その結果状態が発話時にまで続いている、あるいは先行して起こった事象が発話時と関連していることが表されるが、*-li*-VR-*ile* 形式では事象の結果状態が継続していることが前面に表されているのに対して、*-aa*-VR-*a* では先行して起こった事象によって状況が変化したことが前面に表されている。また、*-aa*-VR-*a* 形式は動詞の種類によっては共起に制限があった。*-pal*-「似る」のように変化の時点が見えにくい動詞とは共起ができず、*-imb*-「歌う」のような一部の動作動詞には、動詞自体と後続語に焦点が当たっている場合は共起ができないものがあることが明らかとなった。

ただし、まだ検討すべき課題が残っている。*-aa*-VR-*a* 形式が継続性を示す「～からずっと…している」という表現とは相いれない一方で、*-li*-VR-*ile* 形式は同表現と相性が良いことは (7) で示したとおりである。しかし、*-li*-VR-*ile* 形式が変化の成立時点を示す表現と相いれないことはまだ証明できていない。また、近隣の有力言語であるベンバ語では、テンス・アスペクト形式と情報構造による制約が密接に関わっている (Kula 2016)。(10) ～ (12) で動詞自体や後続語に焦点が当たった場合に用いられた*-aachi*-VR-*a* 形式は、ベンバ語からの借用である可能性が高い形式である。よって、ベンバ語との接触によってランバ語のテンス・アスペクト形式がどのような影響を受けているのかについても、今後検討する必要がある。

記号・略号一覧

sg : Singular 単数形

pl : Plural 複数形

AV: Augment Vowel 冒頭母音

NP: Noun Prefix 名詞接頭辞

HON: Honoric 敬称

SM: Subject Marker 主語接辞

HOD: Hodiernal Past-*aachi*-今日の過去形時制接辞

PAST: -*li*-時制(?)接辞

ANT2: Anterior -*aa*- 完了形時制接辞

ANT1: Anterior -*ile* 完了形末尾辞

F: Final -*a* 基本語尾

参考文献

Botne, Robert (2010) Perfectives and perfects and pasts, oh my!: On the semantics of -ILE in Bantu. *Africana Linguistica.* 16, 31–63.

Bybee, Joan, Revere Perkins & William Pagliuca (1994). *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. University of Chicago Press.

Crane, Thera Marie (2011). *Beyond Time: Temporal and Extra-temporal Functions of Tense and Aspect Marking in Totela, a Bantu Language of Zambia*. Ph.D. thesis, University of California at Berkeley.

Doke, Clement, M. (1922) *The Grammar of the Language of Lamba*. Mackays, ltd.,Chatham

——————— & D. Litt (1938) *Textbook of Lamba Grammar*. Witwatersrand University Press.

Kula, Nancy, C. (2016) The conjoint/disjoint alternation and phonological phrasing in Bemba. Hyman, Larry & J. van der Wal. (eds.) *The conjoint/disjoint alternation in Bantu.* pp.258-294. Mouton de Gruyter.

Nurse, Derek. (2007) The emergency of tense in early Bantu. In *Selected Precedings of the 37th Annual Conference on African Linguistics*, edited by D.L. Payne & J. Peňa. Somerrville, MA: Cascadilla Preceedings Project:164-179.

——————— (2008) *Tense and Aspect in Bantu*. Oxford University Press.

工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現』ひつじ書房.

湯川泰敏 (1995)「ランバ語」『バントゥ諸語動詞アクセントの研究』pp.140-157. ひつじ書房.

D-4　スワヒリ語マクンドゥチ方言における主題を標示する指示詞の縮約形

古本 真
日本学術振興会／大阪大学*
makomako1986@gmail.com

1 はじめに

本稿では、スワヒリ語マクンドゥチ方言 (Kimakunduchi)[1] の指示詞縮約形が主題を標示していることを記述する。マクンドゥチ方言の指示詞は、近称・中称・遠称の三系列からなる。このうち、近称と中称には、基本形に加えて、縮約形が存在することが知られる。しかしその音形以外の特徴については、「切り離されて現れ、他の指示詞の参照として用いられる」(Racine-Issa 2002: 59) という説明に留まっており、それ以外の形式的特徴、機能の詳細については明らかにされていない。

2 マクンドゥチ方言の基本語順と名詞クラス

基本語順は SV(O)だが、別の語順も現れうる。語順の交替には意味役割や情報構造が関与していると考えられる。名詞句内では、修飾要素は名詞に後続する。すべての名詞は、固有の性質としてどの名詞クラスに属しているかが決まっている。本稿では、それぞれの名詞クラスに対して 1~10, 15, 16, 18 の番号を付す[2]。1~10 クラスの名詞は、ヒトやモノ（動植物含む）、コトを指示対象とする。15, 16, 18 クラスの名詞は、場所を指示対象とする[3]。節内では主要部標示型で、主語や目的語の人称や名詞クラスと一致する標識が動詞に現れる。名詞句内では従属部標示型で、修飾する名詞の名詞クラスに応じて修飾要素の形式が異なる。

3 指示詞の音形

マクンドゥチ方言の指示詞は、照応関係にある名詞の名詞クラスに応じて異なる音形をもつ[4]。指示詞の基本形は、近称、中称ともに二音節だが、縮約形は一音節で、近称は基本形の初頭音節に[5]、中称は末音節に対応する。遠称は基本形のみで、縮約形はない。以下に近称と中称の基本形と縮約形、遠称の基本形を挙げる。

---

* 本研究は、JSPS 科研費 13J03150 及び 16J03295 の助成を受けている。二人のインフォーマント、Sigombe Haji Choko 氏（60 代男性）と Zainabu Khatibu Bonde 氏（60 代女性）（ともにマクンドゥチ郡在住）にはここに記して謝意を表す。

1 スワヒリ語はバントゥ諸語（ニジェール・コンゴ語族）の一つであり、東アフリカ沿岸部に 20 前後の地域変種が存在するとされる (Nurse & Hinnebusch 1993: 5–14)。マクンドゥチ方言はそうした地域変種の一つで、タンザニア連合共和国、ザンジバル・ウングジャ島南東沿岸部のマクンドゥチ郡を中心とした地域で話される。話者数は不明。ただし、マクンドゥチ郡の人口は 11,742 人である（2012 年タンザニア国勢調査）。マクンドゥチ方言は、カエ方言 (Kikae) やハディム方言 (Kihadimu) とも呼ばれる。

2 この番号はバントゥ諸語研究で共通して用いられるものを援用している。なお、Racine-Issa (2002: 30–49) とは異なり、11 クラスと 17 クラスを独立したクラスとして認めていないことに留意されたい。この二つを独立したクラスとして認めても、名詞修飾要素や動詞人称接頭辞の音形は、それぞれ 3 クラス、15 クラスと変わらない。

3 15, 16, 18 クラスの場所を表す一般名詞は *mahaa*「場所」以外、他のクラスの名詞に接尾辞-*ni* を付したものと分析できる。また、15 クラスには場所を表す名詞だけでなく、*ku*-動詞語幹という形式の、動詞から品詞転換した事態を表す名詞も属する。

4 マクンドゥチ方言の音素目録は以下のように提示できる。母音 /i, e [ɛ], a, o [ɔ], u/、無声無気閉鎖音 /p, t, k/、無声無気破擦音 /ch [ʧ]/、有気閉鎖音 /pʰ, tʰ, kʰ/、有気破擦音 /chʰ [ʧʰ]/、 前鼻音化阻害音 /mb, nd, nj [ndʒ], ng [ŋg]/、入破音 /b [ɓ], d [ɗ], j [ʃ], g [ɠ]/、摩擦音 /f [ɸ], v [β], th [θ], dh [ð], s, z, sh [ʃ], gh [ɣ], h/、鼻音 /m [m~m̩], n, ny [ɲ], ng' [ŋ], N/、流音 /l, r/、接近音/y [j], w/。/N/ は成節鼻音である。/N/ の調音点は未指定で後続する子音に同化する。[ ]内の表記は IPA によるより近似的な音価である。本稿では[ ]外の表記を用いる。ただし /m/ は、接近音以外の子音が後続して成節的になる場合、m̩と表記する。なお、この本稿で用いる表記法は、標準スワヒリ語の正書法をもとにしている。

5 18 クラスの近称については、基本形が *m̩no*、縮約形が *mu* で基本形の初頭音節と縮約形の音形が異なる。

表 1：指示詞の音形

	近称基本	近称縮約	中称基本	中称縮約	遠称基本
cl1	*yuno*	*yu*	*uyo*	*yo*	*yulya*
cl2	*wano*	*wa*	*wao*	*o*	*walya*
cl3	*uno*	*u*	*uo*	*o*	*ulya*
cl4	*ino*	*i*	*iyo*	*yo*	*ilya*
cl5	*lino*	*li*	*ilyo*	*lyo*	*lilya*
cl6	*yano*	*ya*	*yayo*	*yo*	*yalya*
cl7	*kino*	*ki*	*icho*	*cho*	*kilya*
cl8	*vino*	*vi*	*ivyo*	*vyo*	*vilya*
cl9	*ino*	*i*	*iyo*	*yo*	*ilya*
cl10	*zino*	*zi*	*izo*	*zo*	*zilya*
cl15	*kuno*	*ku*	*uko*	*ko*	*kulya*
cl16	*vano*	*va*	*avo*	*vo*	*valya*
cl18	*ṃno*	*mu*	*umo*	*mo*	*ṃlya*

4 指示詞縮約形の統語的特徴

本節では、主に指示詞縮約形の統語的特徴について、基本形との相違に着目しながら説明する。まず、(1) に示す通り、指示詞縮約形は名詞を修飾することができない。基本形は単独で述語の項となるだけでなく、名詞に後続してその名詞を修飾することもできるが、縮約形はその特徴を持たない。なお、指示詞の基本形は名詞句内で名詞に先行することも可能だが[6]、縮約形はその位置に現れることもできない。

(1) a. N-m-ono mwalimu *yuno*[7]
1SG.SM-3SG.OM-see.PFV teacher (cl1) DEM.PROX.cl1
b. *N-m-ono mwalimu ***yu***
1SG.SM-3SG.OM-see.PFV teacher (cl1) DEM.PROX.cl1
「私はこの先生を見た」

また、(2) に示す通り、指示詞縮約形は述語の後に現れて、節内の述語に先行する名詞句と同一の対象を指すことがある（以下、この現象を一致と呼ぶ）。一致が生じていることは、(2) の名詞句内の指示詞基本形に応じて、述語の後の縮約形も交替することから分かる。この基本形と縮約形の組み合わせは変えられない。また、近称と中称の基本形は、一致のために用いることができない。この一致という現象に関して他に特筆すべき点は次の通りである。a.) 指示詞縮約形と一致する要素は必ずしも同一節内に現れるわけではない（(5) 参照）。b.) 指示詞縮約形が無くとも文は成立する。c.) 遠称基本形は、一致のために用いられうる（8 節参照）。

(2) a. baskeli *ino* i-bomoko ***i***
bicycle (cl9) DEM.PROX.cl9 cl9.SM-be_broken.PFV DEM.PROX.cl9
「この自転車は壊れている」
b. baskeli *iyo* i-bomoko ***yo***
bicycle (cl9) DEM.MED.cl9 cl9.SM-be_broken.PFV DEM.MED.cl9
「その自転車は壊れている」

ところで、指示詞基本形は、現場指示に限れば、指示対象の物理的距離に応じて使い分けがなされる。この一致という現象における近称と中称の交替から、指示詞縮約形も同様に使い分けられていることが分かる。

5 指示詞縮約形の主題標識としての可能性

4 節で、近称と中称の指示詞縮約形が対応する基本形とは異なる特徴をもつことを示した。このことから、

[6] 名詞句内の指示詞の現れる位置によって、指示詞と名詞との意味関係は異なるかもしれない。指示詞が名詞に後続する場合は、名詞を限定的に修飾するのに対して、先行する場合は、同格的な関係にある可能性がある。

[7] 本稿では、例示の際、指示詞基本形は斜体、指示詞縮約形は斜体太字で提示する。また、指示詞縮約形は、先行する自立語をホストとする接語とみなしたほうがよいが、本稿では便宜上分かち書きする。

縮約形は単に基本形を短縮したものではなく、基本形と異なる特殊な用法をもつ可能性があることが分かる。そして、その用法は主題 (topic) 標示であると推測される。本節では、このように推測される理由を述べる。

まず、指示詞縮約形と一致する要素が述語に先行しているという事実から、縮約形が主題を標示していることが示唆される。(2) は指示詞縮約形が主語と一致する例だが、一致する文法関係は、主語だけに限らない。(3) は、述語の前に現れる目的語と一致する例である。

(3) *yuno* mwalimu jana nyi-m̩-kut^{h}u ***yu***
DEM.PROX.cl1 teacher (cl1) yesterday 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV DEM.PROX.cl1
「この教師に、昨日私はあった」

バントゥ諸語の中には、 述語の前に主題構成素が現れる言語がある (米田 2008)。(4) の通り、マクンドゥチ方言でも、述語の前に Wh 疑問文の答えとなる非主題構成素 (cf. Lambrecht 1994: 122, 232) は現れることはできない。目的語が述語の前に現れる (4B') は、ありうる語順だが、(4A) のような Wh 疑問文の答えとはなりえない。このことから、述語に先行する目的語が主題構成素であることは十分に想定できる。

(4) A: ku-okoto nini
2SG.SM-pick_up.PFV what
「あなた、何を拾ったの」
B: nyi-okoto embe
1SG.SM-pick_up.PFV mango
B': *embe nyi-i-okoto
mango 1SG.SM-cl9.OM-pick_up.PFV
「私はマンゴーを拾った」

以上のことは次のようにまとめられる。a.) 指示詞縮約形は、主語だけでなく目的語とも一致する、b.) その一致する目的語は述語に先行する、c.) 述語に先行する目的語は主題構成素の可能性が高い。こうした一致する要素の特徴を見ると、指示詞縮約形は、主題を標示するために用いられているのではないかと推測される。

また、(5) のように、指示詞縮約形が先行文脈に現れる対象を指し示す例からも、指示詞縮約形によって主題が標示されていることが示唆される。主題は、既に議論の対象となっているもの、あるいは文脈から得ることができるものである (Lambrecht 1994: 150)。

(5) mie si-na-kunywa ***yo***
1SG 1SG.SM.NEG-IPFV-drink DEM.MED.cl9
（*dawa*「薬」（9 クラス）を飲むように言われた男が）「私は、それは飲まない」

6 診断

本節では、マクンドゥチ方言の指示詞縮約形が主題を標示しているかどうかを確認する。用いるテストは次の三つである。① Wh 疑問文の答えと一致できるか。② 事象報告文の主語と一致できるか。③ *kila* 'every'「あらゆる」を含む名詞句と一致できるか。

まず、(6) の通り、指示詞縮約形は、非主題構成素である Wh 疑問文の答えと一致することができない。(6B') は、指示詞縮約形と一致する名詞句が述語に後続するという非典型的な語順だが、疑問文「昨日パンドゥは来た？」答えにはなる。指示詞縮約形が主題を標示していると仮定すると (6B') が (6A) の答えとはならないのは、主語の *pandu*「パンドゥ」が縮約形により主題構成素と解釈されるためであると考えられる。

(6) A: jana ka-ja nani
yesterday 3SG.SM-come.PFV who
「昨日誰が来たの？」
B: jana ka-ja pandu
yesterday 3SG.SM-come.PFV PN (cl1)
B': *jana ka-ja ***yo*** pandu
yesterday 3SG.SM-come.PFV DEM.MED.cl1 PN (cl1)
「昨日パンドゥ（人名）が来た」

次に、事象報告文 (event-reporting sentence) に指示詞縮約形が現れることができないことを示す。指示詞縮約形が主題を標示していると仮定すると、(7B') は指示詞縮約形によって、主語の *ṃzungu*「白人」が、主題構成素として解釈されるために、容認されないと考えられる。(7B) のような事象報告文の主語は主題構成素とはならない (Lambrecht 1994: 137)。 なお、事象報告文を答えとして要求する (7A) のような疑問文がなければ、(7B') はなんの問題もなく容認される。

(7) A: va-na nini mbona wat^{h}u wengi
cl16.SM-POSS[8] what why people many.cl2
「(そこで) 何があるの？なんでたくさんの人がいるの？」
B: ṃzungu ka-na-cheza ngoma
white_person (cl1) 3SG.SM-IPFV-play dance
B': *ṃzungu ka-na-cheza ngoma ***yo***
white_person (cl1) 3SG.SM-IPFV-play dance DEM.MED.cl1
「白人が踊りを踊っている」

最後は、指示詞縮約形が *kila* 'every'「あらゆる」を伴う名詞句と一致できないことを示す例である。主題表現は、同定可能な指示対象を持たねばならず、*everybody* のような量化された表現は主題になりえないとされる (Lambrecht 1994: 156, Jacobs 2001: 652–654)。指示詞縮約形が主題を標示していると仮定すると、(8) が容認されないのは、*kila* を伴う非主題構成素と一致することができないためであると説明できる。

(8) *kila ṃt^{h}u ka-ja ***yo***
every person (cl1) 3SG.SM-come.PFV DEM.MED.cl1
「あらゆる人が来た」

上記三つのテストから、指示対象を主題として解釈できない構成素は、指示詞縮約形と一致できないことが分かる。このことから、指示詞縮約形は主題を標示するために用いられていると考えられる。

7 枠組設定の主題

指示詞縮約形によって主題として標示可能なのは、主語や目的語といった必須項（(2) (3) 参照）に限らない。以下の例では、それぞれ指示詞縮約形が、所有者や場所、時を表す表現と一致している。

(9) *yuno* mwanak^{h}ele baskeli yake i-bomoko ***yu***
DEM.PROX.cl1 child (cl1) bicycle his cl9.SM-be.broken.PFV DEM.PROX.cl1
「この子供は、彼の自転車が壊れている」(所有者)

(10) kajengwa nyi-okoto embe ***ko***
PN (cl15) 1SG.SM-pick_up.PFV mango DEM.MED.cl15
「カジェングワ（地名）で私はマンゴーを拾った」(場所)

(11) wakati a-ø-o-vyaligwa mwanangu ny-evu ṃji-ni ***o***
time (cl3) 3SG.SM-PFV-cl3.REL-bear.PASS my_child 1SG.SM-COP.PST town-LOC DEM.MED.cl3
「私の子供が生まれたとき、私は街にいた」(時)

主題には、二つのタイプがあることが指摘されている (Chafe 1976: 50–51, Jacobs 2001: 655–658, cf. Lambrecht 1994: 118)。一つは、所与の場面で、命題がある指示対象について述べる際の、その指示対象のことである (Lambrecht 1994: 131)。もう一つのタイプは、枠組設定 (frame-setting) と呼ばれ、命題の真理条件（命題が成立する領域）を制限する空間、時間、個体といった枠組みが主題により設定される (Chafe 1976: 50, Jacobs: 2001: 656)。指示詞縮約形で標示されるのが、主語や目的語の場合、その指示対象は命題の真理条件を変えないことから、前者のタイプの主題であると考えられる。それに対して、(9)–(11) で、指示詞縮約形によって標示されているのは、後者のタイプの主題である。つまり、主題を上述のように二つのタイプに分けた場合[9]、

[8] 15, 16, 18 クラスの主語標識を伴う *-na*「所有」は、直後の名詞句の指示対象がある場所に存在することを表す。

[9] Jacobs (2001) は、プロトタイプ的な主題構文の特徴を挙げたうえで、現代ドイツ語の複数の主題構文がそれらを等しく兼ね備えているわけではないことを論じている。この議論に当てはめれば、マクンドゥチ方言の指示詞縮約形で標示

指示詞縮約形はどちらのタイプの主題も標示できるといえる。

ここまで挙げた例で指示詞縮約形によって標示される主題は、枠組みであっても、名詞句によって表されうるものであった。しかし、指示詞縮約形と一致するのは、名詞句に限らない可能性がある。(12) は条件節を含む文だが、文末に 8 クラス中称の指示詞縮約形が現れる。

(12) yanga i-ka-shinda ch^{h}a-ja-ku-k^{h}a pesa ***vyo***
PN cl9.SM-COND-win IRR:1SG.SM-come-2SG.OM-give money DEM.MED.cl8
「ヤンガ（サッカーチーム名）が勝ったら、私はあなたにお金をあげるだろう」

(11) のような時間表現は、3 クラスだけでなく 8 クラスの指示詞縮約形と一致することもできる[10]。このことから、8 クラスの指示詞縮約形は、(12) のような条件節で表される枠組みとも一致している可能性が考えられる。このように仮定すると、(13) にみられるような、自然談話の中でしばしば観察される指示対象不明の 8 クラスの指示詞縮約形も、音形では表されない枠組設定の主題を標示していると推測できる。

(13) na-kwimba ***vyo***
IPFV:1SG.SM-sing DEM.MED.cl8
（お話をしてくれないかと頼んだのちに）「（話をしたら、物語中で）私は歌う」

8 指示対象が遠くにある場合

指示詞縮約形には近称と中称しか存在せず、その主題標示の対象も指示詞の近称や中称で指示できるものに限定される（4 節参照）。それでは、指示詞遠称の指示対象はどのように主題であることが標示されるのだろうか。本節では、遠くにあって、近称や中称の指示詞では指せない対象の主題標示方法について記述する。

最初に、主題標示用法以外の指示詞の指示対象について、現場指示に限って簡単に述べる。マクンドゥチ方言の 1~10 クラスの指示詞近称と中称は視界にあるものを指示できる。一方、同じ 1~10 クラスの遠称は視界にあるものを指示できない。ある指示対象が、視界にあるが、指示詞中称で表せないほど遠くにある場合は、中称基本形+*ko* という複合的な形式が用いられる。この *ko* は 15 クラスの中称に由来すると考えられる。

遠称基本形や中称基本形+*ko* の指示対象が主題であることを標示する場合は、遠称基本形、あるいは中称縮約形が述語の後に現れる。以下でその使い分けを説明する。

まず (14) に示す通り、視界にない、指示詞遠称の指示対象が主題であることを標示する際は、述語の後に遠称基本形が現れる。

(14) gari *ilya* i-cha-kugwa *ilya*
car (cl9) DEM.DIST.cl9 cl9.SM-IRR-drop DEM.DIST.cl9
「あの車は落ちるだろう」（すでに過ぎ去った車を指して）

主題として標示したい指示対象が視界にあり、中称基本形+*ko* で指示される場合は、(15) の通り、中称縮約形だけでなく、遠称基本形も現れる。この使い分けは、指示対象の距離による。つまり、主題標示用法では、指示対象が視界にあっても遠称基本形が使われうる[11]。

(15) a. gari *iyo+ko* i-cha-kugwa ***yo***
car (cl9) DEM.MED.cl9+ DEM.MED.cl15 cl9.SM-IRR-drop DEM.MED.cl9
「あの車は落ちるだろう」（比較的近くにある車を指して）

される主題は+Addressation/±Frame-setting であると考えられる（+Addressation は本文中の前者のタイプの主題に対応、6 節のテスト③で測定可能）。つまり、指示詞縮約形で標示される二つのタイプの主題は、厳密に言えば、Addressation か Frame-setting かで分けるのではなく、ともに Addressation で、Frame-setting かどうかに違いがあると考えるべきである。

[10] (11) のように時を表す場合、関係節標識も 3 クラスと 8 クラスのものが交替可能である。

[11] 指示詞遠称が、主題標示用法でのみ視界にあるものを指示できるという共時的事実は、かつて指示詞遠称がそれ以外の用法でも視界にあるものを指示していたことを示しているかもしれない。スワヒリ語他変種（ウングジャ方言、トゥンバトゥ方言）の指示詞遠称は視界にあるものを指示できる。

b. gari　*iyo+ko*　i-cha-kugwa　*ilya*
car (cl9)　DEM.MED.cl9+ DEM.MED.cl15　cl9.SM-IRR-drop　DEM.DIST.cl9
「あの車は落ちるだろう」（比較的遠くにある車を指して）

9 結論と課題：指示詞縮約形は主題であることを際立たせているのか

本稿では、まずスワヒリ語マクンドゥチ方言の指示詞縮約形が主題を標示していることを示した。そして、この指示詞縮約形で枠組設定の主題も標示できること、遠くの指示対象は、視界にあるかどうかに関わらず、遠称基本形によって主題として標示されることを述べた。以下では、残る課題について説明する。

主語と目的語が述語の前に現れる場合、指示縮約形によって主題であることが標示できるのは、そのどちらか一方に限られる。(16) に示す通り、縮約形は、主語と目的語のどちらとも一致しうるが、順序に関わらず、その二つと一致する指示詞縮約形が同時に現れることはできない。

(16) a. fatuma　embe　ka-zi-okoto　***yo***
PN (cl1)　mangoes (cl10)　3SG.SM-cl10.OM-pick_up.PFV　DEM.MED.cl1
b. fatuma　embe　ka-zi-okoto　***zo***
PN (cl1)　mangoes (cl10)　3SG.SM-cl10.OM-pick_up.PFV　DEM.MED.cl10
c. *fatuma　embe　ka-zi-okoto　***yo***　***zo***
PN (cl1)　mangoes (cl10)　3SG.SM-cl10.OM-pick_up.PFV　DEM.MED.cl1　DEM.MED.cl10
d. *fatuma　embe　ka-zi-okoto　***zo***　***yo***
PN (cl1)　mangoes (cl10)　3SG.SM-cl10.OM-pick_up.PFV　DEM.MED.cl10　DEM.MED.cl1
「ファトゥマ（人名）はマンゴーを拾った」

例えば、(16a) では、指示詞縮約形は主語 *fatuma*「ファトゥマ」と一致しており、主語は主題構成素であると考えられる。また述語の前に現れる目的語が主題化されていると仮定すれば（(4) 参照）、目的語の *embe*「マンゴー」も主題構成素と考えられる。Lambrecht (1994: 146–150) は、文が二つの主題を持ちうることを指摘しており、(16) に主題が二つあるとみなすこと自体にそれほど問題はない。しかし、ここで次の二つの疑問が生じる。① 指示詞縮約形によって一つの主題しか標示できないのはなぜか。② 語順という他の手段で主題構成素であることが示されているにも関わらず、主題を標示する指示詞縮約形が現れるのはなぜか。

上記①②の疑問は、指示詞縮約形という有標な形式の出現を決定する要因は何か、と言い換えることができる。そして、形式的に有標であることに着目すると、指示詞縮約形は単に主題を標示しているのではなく、ある指示対象が主題としてより有標な場合に、それが主題であることを明示的に際立たせているのではないか、という予測をたてることができる。有標な主題とは、相対的に主題として解釈しにくいもの、あるいは主題性が相対的に低いものである。主題の有標性は、有生性、文法関係、活性度（先行文脈にあらわれるか）、人称を基準として測ることができるだろう (cf. Givón 1976: 152, Sasse 1984: 258–260, Nikolaeva 2001: 6, 23)。この検証を今後の課題としたい。

【略号一覧】1/2/3: 1/2/3 人称、cl:名詞クラス（e.g. cl2=2 クラス）、COND:条件、COP:コピュラ、DEM:指示詞、DIST:遠称、IPFV:未完結、IRR:未実現、LOC:所格、MED:中称、NEG:否定、OM:目的語標識、PASS:受動、PFV:完結、PN:固有名詞、POSS:所有、PROX:近称、PST:過去、SG:単数、SM:主語標識

【参考文献】Chafe, W. (1976). Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view. In *Subject and topic*, C. N. Li (ed.), 25–55. New York: Academic Press./ Givón, T. (1976). Topic, pronoun, and grammatical agreement. In *Subject and topic*, C. N. Li (ed.), 25–55. New York: Academic Press./ Jacobs, J. (2001). The dimensions of topic-comment. *Linguistics*, *39*, 641–682./ Lambrecht, K. (1994). *Information structure and sentence form*. Cambridge: Cambridge University Press./ Nikolaeva, I. (2001). Secondary topic as a relation in information structure. *Linguistics*, *39*, 1–50./ Nurse, D., & Hinnebusch, T. J. (1993). *Swahili and Sabaki: A linguistic history.* Berkeley: University of California Press./ Racine-Issa, O. (2002). *Description du Kikae: Parler Swahili du sud de Zanzibar: Suivie de cinq contes.* Leuven: Peeters Publishers./ Sasse, H. (1984). The pragmatics of noun incorporation in Eastern Cushitic languages. In *Objects. Towards a theory of grammatical relations*, F., Plank (ed.), 243–268. London and Orlando: Academic Press./ 米田信子 (2008).「マテンゴ語の情報構造と語順」『言語研究』133, 107–132.

タイ語小辞kɔ̂ɔの対話者志向の機能：会話コーパスの一分析

高橋清子
神田外語大学
kiyoko@kanda.kuis.ac.jp

日本言語学会第154回大会
首都大学東京　2017年6月24－25日

1

発表の骨子

- タイ語の語用論的小辞
- 会話コーパス
- 会話におけるkɔ̂ɔの使用例
- 発話初頭で使われるkɔ̂ɔ
- 発話途中で使われるkɔ̂ɔ
- kɔ̂ɔが関与する発話行為タイプ
- kɔ̂ɔの機能体系

2

タイ語の語用論的小辞

表1：　生起する統語位置によるタイ語の語用論的小辞の分類

タイプ	統語位置	機能
1. 独立タイプ（例：nîi）	比較的自由	認識志向 **対話者志向**
2. 句末タイプ（例：náɔ）	韻律句の末尾	認識志向 **対話者志向**
3. 述語初頭タイプ（例：cuŋ）	述語の初め	認識志向 **談話志向**

kɔ̂ɔは「述語初頭」タイプだが、「節初頭（述語とその主語名詞句から成る節の初め）」にも生起する

3

kɔ̂ɔの特徴

- 基本的には述語初頭タイプの小辞
- 動詞述語あるいは名詞述語の直前に生起し、その述語が表す命題内容をそれ以前の談話文脈に関連付けつつ、その述語の命題内容を強調的に、結果的言明として標示する
- 物語の語りにおいては、話の筋となる中核事象を描写する述語に添えられ、その事象が前景化され、話が展開していく

4

kɔ̂ɔの特徴

(1) *kháw* ***kɔ̂ɔ*** *maa* *thǎam*
PRON *** come ask
彼は*** 質問しに来た。

(2) *phɔɔ* *klàp* *pay* ***kɔ̂ɔ*** *nân* *lɛ̀ɔ*
as.soon.as return go *** that PRT
（彼女は）帰ると、 ***あれだ。
kɔ̂ɔ *cháy* *chiiwít* *naaŋ* *pokatìɔ*
*** spend life RPON normally
***普通に彼女自身の生活を送った。

5

会話で使われるkɔ̂ɔ

- 対話者からの質問に対する返答の初めに生起することがある
- 断言を避ける曖昧な返事（ヘッジ）として使われることがある

→ 節初頭タイプ

6

直接的返事

(3) A: *man* *pen* *rûaŋ kìaw* *kàp* *ɔaray*
PRON COP story link with what
それ（＝その映画）は何に関する話?
B: ***kɔ̂ɔ*** *kháw* *khèŋ rót* *kan*
*** PRON race car REC
***彼らはカーレースをするんだ。

7

曖昧な返事（ヘッジ）

(4)A: *chûaŋ níi* *dây* *pay* *duu*
these.days REAL go watch
ɔaray *bâaŋ nîa*
what any PRT
最近どんな（映画）を観に行った?
B: ***kɔ̂ɔ*** *duu* *lǎay* *rûaŋ* *náɔ*
*** watch many story PRT
***たくさん（の映画を）観たよ。

8

会話コーパス

- 『多言語ことばコーパス（タイ語）』（東京外国語大学語学研究所）
  バンコクの大学生同士によるカジュアルな会話
  音声データとその書き起こしデータ、計10 セット
- 使用した分析データ
  友人同士である男子学生と女子学生の約32分間の自然発生的な会話
  主な話題： 好きなもの（映画や食べ物など）
  最近の出来事（地震や爆発など）

9

分析データから収集したkɔ̂ɔ

kɔ̂ɔの使用例の総数：128トークン

- 発話途中での使用：115トークン（約90%）
  談話志向の機能 談話の結束性
- 発話初頭での使用：13トークン（約10%）
  対話者志向の機能
  節初頭タイプ： 対話者への協調的対応
  質問への返答、言明への反応
  述語初頭タイプ： 共同完遂（言明への反応の1変種）
  cf. ‘collaborative completion’
  Wilkinson and Kitzinger (2011: 31–34)

10

描写される事象の主要参与者

- 会話をする二人の発話において描写される事象の主要参与者（主題あるいは主語名詞句が指示するもの）が同じか否か

1. 共通タイプ： 主要参与者が同じ
   二人の発話の統合度が高い
2. 非共通タイプ： 主要参与者が異なる
   新たな視点から事象を描写する

11

主要参与者が共通

(5) A: *thîi* *ɔés sii bii* *nîi*
at SCB PRT
rabɔ̀ɔt *rʉ̌ʉ plàaw*
explode PRT
SCBは、爆発したの？
B: ***kɔ̂ɔ*** *rabɔ̀ɔt* *yùu* *náɔ*
*** explode CON PRT
***（SCBは）爆発していたよ。

12

主要参与者が非共通

(3) A: *man* *pen* *rûaŋ kìaw* *kàp* *ɔaray*
PRON COP story link with what
それ（＝映画）は何に関する話?
B: ***kɔ̂ɔ*** *kháw* *khèŋ rót* *kan*
*** PRON race car REC
***彼ら（＝映画の登場人物）はカーレースをするんだ。

13

発話初頭のkɔ̂ɔ

1. 相手の質問への返答 Response to question
1.1. 本来的な返事　直接的返事（例(3)）
　　曖昧な返事（ヘッジ）（例(4)）
1.2. 歪曲された返事（説明）（例(6)）

2. 相手の言明への反応 Association with assertion
2.1. 調和的反応　結果の叙述（例(7)）
　　論理的帰結の叙述（例(8)）
　　論理的帰結の叙述と奨励的な示唆（例(9)）
2.2. 非調和的反応　異議説明（例(10)）
　　譲歩的叙述（例(11)）

14

質問への返答
本来的な返事

(3) A: *man* *pen* *rûaŋ* *kìaw* *kàp* *ɔaray*
PRON COP story link with what
それ（＝その映画）は何に関する話?
B: ***kɔ̂ɔ*** *kháw* *khèŋ* *rót* *kan*
*** PRON race car REC
***彼らはカーレースをするんだ。

(4)A: *chûaŋ níi* *dây* *pay* *duu* *ɔaray* *bâaŋ* *nîa*
these.days REAL go watch what any PRT
最近どんな（映画）を観に行った?
B: ***kɔ̂ɔ*** *duu* *lǎay* *rûaŋ* *náɔ*
*** watch many story PRT
***たくさん（の映画を）観たよ。

15

質問への返答
歪曲された返事（説明）

(6) A: *lɛ́ɛw* *mii* *rûaŋ* *nǎy* *ɔìik* *ɔàɔ*
then exist story which else PRT
それから、さらにどの（映画の）話がある?
B: ***kɔ̂ɔ*** *nǎŋ* *thay* *mây* *khây*
*** movie Thai NEG rather
dây *duu* *náɔ*
REAL watch PRT
***タイ映画はあまり観てないんだ。

16

言明への反応
調和的反応：結果の叙述

(7) A: *man* *phâəm* *khûn*
PRON increase INC
rûay rûay
continually
それ（＝報道されたチェンマイ地震の震度）がどんどん増した。
B: ***kɔ̂ɔ*** *ləay* *ŋoŋ*
*** therefore be.puzzled
***だから混乱した。

17

言明への反応
調和的反応：論理的帰結の叙述

(8) A: *dây* *rɔ́ɔy hâa sìp* *têm*
obtain 150 score
（もしゴールデンスナッチを捕えられたら）150点を獲得する。
B: *ɔɔ̌ɔ* ***kɔ̂ɔ*** *khɯɯ* *chanáɔ* *ŋíi*
PRT *** namely win like.this
rǎə
PRT
なるほど、***つまりそうやって勝ったのか。

18

言明への反応
調和的反応：帰結叙述と奨励的示唆

(9) A:… *kɔ̂ɔ* *dii* *ɔ̀ɔ*
PRT be.good PRT
…（日本で日本食を食べるのは）いい。
B: ***kɔ̂ɔ*** *tɔ̂ŋ* *lɔɔŋ* *pay* *sák* *khráŋ* *nɯŋ*
*** must try go just time one
duu
look
***一度は行ってみないといけない。

19

言明への反応
非調和的反応：異議説明

(10)A: *mii* *hɛɛmbəəkoŋ hɛɛmbəəkɔ̂ə*
exist hamburgers.and.the.like
ハンバーガーの類がある。
sataabák *yaŋ* *mii* *yùu*
Starbucks also exist CON
スターバックスもある。
tɛ̀ɛ *yùu* *thîi* *tookiaw* *náɔ*
but be.located at Tokyo PRT
あるのは東京だけどね。
B: ***kɔ̂ɔ*** *yàak* *thaan* *yùu*
*** want eat CON
***やはり（日本食が）食べたい。

20

言明への反応
非調和的反応：譲歩的叙述

(11) A: *com* *nám* *taay*
sink water die
（その映画の登場人物は）溺れ死んだ。
B: *tɛ̀ɛ* ***kɔ̂ɔ*** *sanùk* *dii*
but *** be.fun be.good
でも、***（その映画のストーリーは）楽しい。

21

発話初頭のkɔ̂ɔ

- 関与する発話行為が何であれ、kɔ̂ɔを挟んだ二人の発話には、親和性がある
- 一貫性のある一つのユニットを構成する
- kɔ̂ɔを使って積極的に相手に対応することは、相手と協調しながら会話を続けたいという意向の表れとなる
- 結論的判断や譲歩的評価といったモーダルな意味合い（話者の主観的認識）が含まれる

22

発話初頭のkɔ̂ɔ

表2：事象の主要参与者の共通性と発話行為タイプによる発話初頭のkɔ̂ɔの分類

事象の主要参与者 / *発話行為*	共通タイプ [計2]	非共通タイプ [計11]
返答タイプ [計7] 1.本来的な返事 [6] 2.歪曲された返事 [1]	[計2] [2]（例(5)） なし	[計5] [4]（例(3)） [1]（例(6)）
反応タイプ [計6] 1.調和的反応 [4] 2.非調和的反応 [2]	なし	[計6] [4]（例(7)） [2]（例(8)）

23

発話初頭のkɔ̂ɔ

「対話者への協調的対応」を標示する
Reaction marker

1. 「質問への返答」を標示する
   Response marker
2. 「言明への反応」を標示する
   Association marker

24

述語初頭タイプ
共同完遂（言明への反応の1変種）

(12) A: *tɛ̀ɛ* *thâa* *thaan* *thoŋkhátsɯ̀ɔ*
but if eat breaded.pork
thúk *wan* *kɔ̂ɔ*
every day PRT
でももし毎日トンカツを食べたら
B: (*man*) ***kɔ̂ɔ*** *lîan*
(PRON) *** be.oily
(それは)***胸やけする。

25

発話途中のkɔ̂ɔ

- 述語初頭タイプ
  強調的描写（前景化）（例(2)）
- 節初頭タイプ
  追加的叙述（例(13)）
  適切な解釈（例(14)）
  結果の叙述（例(15)）
  論理的帰結の叙述（例(16)）

26

発話途中のkɔ̂ɔ
強調的描写（前景化）

(2) *phɔɔ* *klàp* *pay*
as.soon.as return go
kɔ̂ɔ *nân* *lɛ̀ɔ*
*** that PRT
kɔ̂ɔ *cháy* *chiiwít* *naaŋ*
*** spend life RPON
pokatĭɔ
normally
（彼女は）帰ると、***あれだ。***普通に彼女自身の生活を送った。

27

発話途中のkɔ̂ɔ
追加的叙述

(13) *yaŋ* *pen* *mɛ̂ɛ mót* *yùu* *ləay*
still COP witch CON PRT
（彼女は）依然として魔女のままだった。
kɔ̂ɔ *dooreemii* *pay* *chíi* *nâa*
*** Doremi go point face
***ドレミは行って（彼女の）顔を指差した。

28

発話途中のkɔ̂ɔ
適切な解釈

(14) *thîi tɔɔn rɛ̂ɛk hɛɛrîi* *man* *yùu* *bâan*
at.first Harry PRON stay house
chây máy
PRT
初めハリーは家にいたでしょ？
kɔ̂ɔ *thúk* *pii* *man* *càɔ* *tɔ̂ŋ* *klàp*
*** every year PRON IRR must return
maa *thîi* *bâan*
come at house
***毎年彼は家に帰って来なくてはいけないんだ。

29

発話途中のkɔ̂ɔ
結果の叙述

(15) *mɛ̂ɛ* *bɔ̀ɔk* *wâa* *khít* *sáɔ* *wâa*
mother tell COMP think PRT COMP
yùu *yîipùn lɛ́ɛw kan* *lûuk*
stay Japan PRT child(address.term)
母は「日本に住むことを考えなさい」と言った。
kɔ̂ɔ *ləay* *phim* *pay*
*** therefore Phim(proper.name) go
bɔ̀ɔk *phûan* *wâa* …
tell friend COMP
***だからピム（＝自分）は行って友人にこう告げた。…

30

発話途中のkɔ̂ɔ 論理的帰結の叙述

(16) *mii phûu lên cèt khon sɔ̌ɔŋ fàay*
exist player seven CLF two CLF
fàay lɔ́ cèt khon khèŋ kan
CLF per seven CLF compete REC
tɔ̂ŋ càp
must catch
どちらのチームにもプレーヤーが7人いる。チームごとに7人が競い（ゴールデンスナッチを）捕えなければならない。
kɔ̂ɔ khɯɯ satítkəəkhɔ̌ɔŋ tɛ̀ɛ lɔ́ thiim tɔ̂ŋ càp
*** namely sticker of each team *must catch*
koondên sanát hây dây
Golden.Snatch without.fail
***つまり、それぞれのチームの突き具はどうにかゴールデンスナッチを捕えなければならない。

31

まとめ

表3：会話で使われるkɔ̂ɔの機能

	発話初頭：*対話者志向* 「対話者への協調的対応」	発話途中：*談話志向* 「談話の結束性」
述語初頭	共同完遂 （言明への反応の1変種）[1]	強調的描写 （前景化）[104]
節初頭	i) 質問への返答 i-a) 本来的な返事 [6] i-b) 歪曲された返事 [1] ii) 言明への反応 ii-a) 調和的反応 [3] ii-b) 非調和的反応 [2]	追加的叙述 [5] 適切な解釈 [3] 結果の叙述 [2] 論理的帰結の叙述 [1]

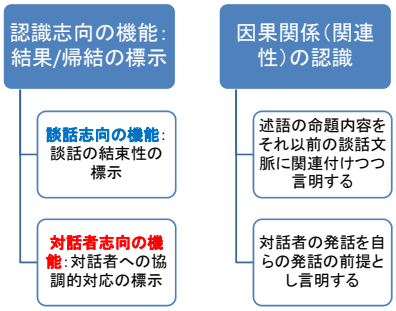
32

まとめ

- 対話者志向か談話志向かという機能の違いは、述語初頭に生起するのか節初頭に生起するのかというkɔ̂ɔの統語位置によって決まるのではなく、対話者の発話を考慮するかどうかという話者の意図によって決まる
- 対話者志向の場合、話者は対話者の発話を考慮し、その発話内容を自らの叙述の前提とする

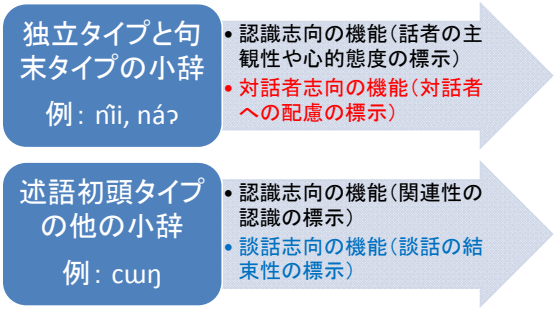
33

kɔ̂ɔの機能体系



34

他の小辞との比較



35

主な参考文献と会話コーパス

- Chodchoey, Supa W. 1986. Strategies in Thai Oral Discourse. Ph.D. thesis, The Pennsylvania State University.
- Iwasaki, Shoichi and Preeya Ingkaphirom. 2005. A Reference Grammar of Thai. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lerner, Gene H. 1991. On the syntax of sentences-in-progress. *Language in Society* 20: 441–458.
- Sa-anwong, Wiyada. 1981. *Kaan sadɛɛŋ khwaam mǎay khɔ̌ɔŋ kham kɔ̂ɔ nay phaasǎa thay* [The use of the expression /kɔ̂ɔ/ in the Thai language]. M.A. thesis, Silpakorn University.
- Singhabhandhu, Panomporn. 1983. *Wíkhrɔ́ɔ kaan cháy kham kɔ̂ɔ nay phaasǎa thay* [An analysis of the word /kɔ̂ɔ/ in Thai]. M.A. thesis, Chulalongkorn University.
- Wilkinson, Sue and Celia Kitzinger. 2011. Conversation analysis. In Hyland, Ken and Brian Paltridge (eds.) The Continuum Companion to Discourse Analysis, 22–37. London & New York: Continuum International.
- 『多言語ことばコーパス（タイ語）』東京外国語大学語学研究所

36

D-6

オリヤ語における、同一格の連続を許す構文環境と、許さない構文環境

山部　順治（ノートルダム清心女子大学）yamabe@post.ndsu.ac.jp

キーワード：1. オリヤ語（印欧語、インド東部）；2. 形態統語論、記述的文法；3. 格

1.　要旨

オリヤ語（印欧語、インド東部）では、文中で同一格の名詞が連続すること（以下、同一格連続という）が、構文環境によって可能だったり不可能だったりする。

本発表は、これに関して事実①～④を報告する。

(1)　①　主語を欠く節においては、同一格連続が排除される。

節に主語がないとは、次の A,B のいずれかのこと。

A. 統語構造上、節に主語位置がない。例、restructuring（Wurmbrand）構文における従属節。（第４節）

B. 統語構造上は主語があるが、意味的に主語が動作主でなく経験者や原因である。（第５節）

②　①に該当する節が複文の一部をなしている場合、同一格連続は、該当節に止まらずその上位節や下位節にまで及ぶ領域から、排除される。下位の節あるいは上位の節が主語を持つものであっても、そうなる。（第６節）

③　関わりのある同一格は３つ：目的格どうし、所格どうし、奪格どうし。格の文法的由来（動詞の必須項か付加的項か、など）は問われない。

④　③の３格について、（①②で規定される）排除の構文環境の種類は同一。

分析にあたっては、(1)の事実記述のしかたに沿った形で、同一格連続を排除する制約（(2)では、同制約という）を想定する。そして（ア）（イ）の点を主張する。

(2)　（ア）　③④から、同制約は、格形の実現（名詞句に付与された格をどんな条件で表出できるか）に関する。格付与（どんな条件でどんな格が名詞句に付与されうるか）についてでない。

（イ）　②から、同制約が点検する文中領域は、大きさに関して、ときに複数の節を跨いで延びる。

2.　格、およびその他の格関係表現

第２節では、本発表でいう格と、そうでないものを区別する。格は、(3)の５つ。格関係を表し、１音節のもの。

(3)

主格	NOM	ϕ	主語、一部の非情物目的語
目的格	OBJ	*-ku* ～ *-te*	一部の非情物目的語、人の目的語、間接目的語、斜格主語
所格	LOC	*-re*	場所、手段
奪格	ABL	*-ru*	「から」
属格	GEN	*-ra*	名詞の修飾語「の」、斜格主語

本発表は、有標格のうち目的格・所格・奪格の３格を扱い、属格は扱わない。属格は他の３格から（次の２点で）振る舞いがズレており今日の議論を複雑にするため、また、属格について調査が不十分であるため、である。第１に、分布に関して、他の３格が節の中に現れるのに対し、属格が現れる箇所はおもに名詞句の中である。第２に、同一格連続に関して、他の３格よりも厳しく制約されるようである。

格関係の表現には、格のほかに、(4)の３類 a,b,c がある。(4a)のように、２音節以上の表現が数個あり、後置詞

と呼ぶ。(4b)のように、所格と奪格は、特定の諸用法では-Thaa-を介して名詞に付く。-Thaa-LOC と-Thaa-ABL には１音節の短形がある。 (5c)のような［抽象名詞＋LOC］の表現は、たくさんある。

(4) a. *paai~* 'for', *saha* 'together with', *sahita* 'together with', *dvaaraa* 'by means of', *jogu~* 'because of'

b. *-Thaa-re～-Thi* '？-LOC', *-Thaa-ru～-Thi* '？-ABL'

c. *paakha-re* 'side-LOC, beside' （＝ヒンディー語 *-ke paas*）, *saamnaa-re* 'front-LOC, in front of'

３． 主語を持つ節

第３節では、主語を持つ節においては、同一格連続（以下、下線で示す）が可能である、ということを見る。すなわち、(1)①の逆にあたる事実が成り立っている。主語を持つ節の例として、３.１では単文、３.１では複文の従属節を取り上げる。［本発表でいう単文とは、文中に述語（ふつうは動詞）が１個ある場合を、複文とは、述語（ふつうは動詞）が２個以上ある文のことをいう。］

３.１ 主語を持つ単文

ふつうの単文がそれにあたる。同一格連続が可能である。(4)目的格どうし、(5)所格どうし、(6)奪格どうし、の連続がそうである。（目的格どうしの場合については Yamabe 1995）

(4) *saar maNTu-**ku** saarT-Taa(-**ku**) de-l-e.*
sir Mantu-OBJ shirt-C(-OBJ) give-PAST-3p
あの方はモントゥに（***ku***）シャツを（***ku***）くれた。

*(-**ku**)*：-ku はあってもなくてもよい。
１人を指す p は尊敬

(5) *aajikaali gunu saaikel-**re** sahara-**re** ghur-uch-i.*
nowadays Gunu bicycle-LOC city-LOC go.round-PROG-3s
最近グヌは自転車で（***re***）街を（***re***）回っている。

(6) *saar jaanuaari-**ru** madapaana-**ru** nibruta he-ich-anti.*
sir January-ABL drinking-ABL stop-PERF-3p
あの方は、１月から（***ru***）飲酒を（***ru***）止めている。

３.２ 主語を持つ従属節

目的語制御構文がその例である。ここでも、同一格連続は可能である。(7)目的格どうし、(8)所格どうし、(9)奪格どうしの連続がそうである。例文では、従属節は［S ］で示してある。その主語は、音形のない代名詞であり、△で示してある。なお、△は（格無しではなく）主格である（山部 2016）。

(7) *saar mo-te* ［S △ *ghare baapaan-**ku** ciThiTaa(-**ku**) dekhe-ibaa paai~* ］ *baadhya kar-ich-anti.*
saar me-OBJ athome father-OBJ letter-C-OBJ show-INF compel-PERF-3p
先生は僕に *i* ［S △ *i* 家で父さんに（***ku***）手紙を（***ku***）見せるように ］させた。

(8) *maalika hi~ gunu-ku* ［S △ *saaikel-**re** sahara-**re** ghur-ibaa paai~* ］ *baadhya kar-ich-anti..*
owner EMP Gunu bicycle-LOC city-LOC go.round-INF compel-PERF-3p
店主がグヌに *i* ［S △*i* 自転車で（***re***）街を（***re***）回るように ］させているのだ。

(9) *saanga jaNaka taa-ku* ［S △ *sabu nijisa aarambha-**ru** neT-**ru** kiN-ibaa-ku*］*utsaahita kar-ich-anti.*
friend one he-OBJ all thing beginning-ABL net-ABL buy-INF encourage-PERF-3p
友人は、彼に *i* ［S △*i* 全てのものを初めから（***ru***）通販店で（***ru***）買うように ］勧めた。

第３節の事実に関して、オリヤ語はヒンディー語と対照をなす。ヒンディー語では、単文の場合もそれ以外の場合も一概に、同一節の内部では同一格連続（目的格 ko どうし、具格 se どうし）は不可能である（Mohanan）。

4.　主語を欠く節

第４節では、主語を欠く節においては、同一格連続が不可能であることを見る。４.１と４.２で、それぞれ１つずつ、それにあたる構文を取り上げる。

4.1　主語を欠く従属節

１例は、目的語制御構文で、その使役主が非情物であるもの。そのような構文は、restructuring 構文である（山部 2016）。すなわち、統語構造上、従属節は、範疇的に S に至らず VP どまりであり、（例文(7)〜(9)の△で示されるような）主語を持たない。そのことは、複数個のテスト（もちろん、同一格連続の可否を見るテストとは別のテスト）によって分かっている。

例文(7)〜(9)で使役主が人であったのを、非情物に取り替えると(10)〜(12)になる。後者の従属節では、同一格連続が不可になる。(10)目的格、(11)所格、(12)奪格についてそうなる。

(10)　*　*saarnka kaDaa nirddesa　mo-te*［VP *ghare　baapaan-**ku**　ciThi-Taa-**ku**　dekhe-ibaa paai~*］*baadhya kar-ich-i.*
sir's strict direction　me-OBJ　athome　father-**OBJ**　letter-C-**OBJ**　show-INF　compel-PERF-3p
先生のきびしい指示は、僕に　［VP 家で　父さんに（***ku***）手紙を（***ku***）見せるように］させた。

(11)　*　*maalikanka nirddesa hi~　gunu-ku*［VP　*saaikel-**re**　sahara-**re**　ghur-ibaa paai~*］　*baadhya kar-ich-i..*
owner's direction EMP　Gunu-OBJ　bicycle-**LOC**　city-**LOC**　go.round-PROG-3s　compel-PERF-3s
店主の指示が、グヌに［VP 自転車で（***re***）街を（***re***）回るように］させているのだ。

(12)　*　*saanganka-ra　se kathaa　taa-ku*
friend-GEN　that story　he-OBJ
［VP　*sabu jinisa　aarambha-**ru**　neT-**ru**　kiN-ibaaku*　］*utsaahita kar-ich-i.*
all thing　beginning-***ABL***　net-***ABL***　buy-INF　encourage-PERF-3s
友人のその言葉は、彼を［VP　全てのものを初めから（***ru***）通販店で（***ru***）買うような ］気にさせた。

同一格連続を解消する手立ては３種類ある。解消されれば文は適格になる。第１は、(13)のように、一方の名詞から格語尾を（もし省けるならば）省く。第２は、(14)のように、２名詞の間に１語（kaTaka カタック）を介在させる。第３は、(15)のように、一方の名詞の格語尾を、他の表現（maadhyama-re をとおして）に取り替える。

(13)　…　［VP　*ghare　baapaan-**ku**　ciThi-Taa　dekhe-ibaa paai~*　］…
先生のきびしい指示は、僕に　［ 家で 父さんに（***ku***）手紙を（***ϕ***）見せるように］させた。

(14)　…　［VP　*saaikel-**re**　kaTaka sahara-**re**　ghur-ibaa paai~*］　…
店主の指示が、グヌに［ 自転車で（***re***）カタック市を（***re***）回るように］させているのだ。

(15)　…　［VP　*sabu nijisa　aarambha-**ru**　neT **maadhyama-re**　kiN-ibaaku*　］…
友人のその言葉は、
彼を［全てのものを初めから（***ru***）通販店をとおして（***maadhyama-re***）買うような ］気にさせた。

4.2　主語を欠く文

主語のない構文の１つに、状況可能を表す非人称受動文がある。この構文では、意味上の主語（動作者）を表出できない：主格でもできないし、dvaaraa「〜によって」でもできない。この構文においては、(16)〜(18)の(a)のように、同一格連続は不可である。(16)目的格、(17)所格、(18)奪格についてそうである。対比のため、(b)には、主語を持つ（類義の）構文の例文をあげる；主語は主格で表出しても（あるいは、しなくても）よい；同一格連続は可能である。

(16) a. *aaji* *pilaa-maanan-**ku*** { ***phaTo-guDaa-ku*** | *phaTo-guDaa* } *dekhe-i* *he-l-aa.*
today child-p-**OBJ** photo-C-**OBJ** photo-C show-CP happen-PAST-3s
今日、子供たちに（**ku**）写真を（***ku** | ϕ）見せることができた（3s）。

b. *aaji* *(mu~)* *pilaa-maanan-ku* { *phaTo-guDaa-**ku*** | *phaTo-guDaa* } *dekhe-i* *paar-il-i.*
today I.NOM child-p-**OBJ** photo-C-**OBJ** photo-C show-CP can-PAST-1s
今日、（私は）子供たちに（**ku**）写真を（**ku** | ϕ）見せることができた（1s）。

(17) a. *aajikaali* *saaikel-**re*** { ***sahara-re*** | *sahara-Taa* } *ghur-i* *hu-e* *ni.*
nowadays bicycle-**LOC** city-**LOC** city-C go.round-CP happen-3s not
最近は、自転車で（**re**）街を（***re** | ϕ）回ることができない（3s）。

b. *aajikaali* [S *(aame)* *saaikel-**re*** { *sahara-**re*** | *sahara-Taa* } *ghur-ibaa*] *asambhaba.*
nowadays we.NOM bicycle-**LOC** city-**LOC** city-C go.round-GER impossible
最近は、[S （我々が）自転車で（**re**）街を（**re** | ϕ）回ることは] 不可能だ。

(18) a. * *se jinisa* *agaST-**r u*** *dokaana-**ru*** *kiN-i* *he-b-a* *ni.*
that thing August-**ABL** shop-**ABL** buy-CP happen-FUT-3s not
それを８月から（**ru**）店で（***ru**）買うことができないだろう（3s）。

b. *(aame)* *se jinisa* *agaST-**ru*** *dokaana-**ru*** *kiN-i* *paar-ib-u* *ni.*
we.NOM that thing August-**ABL** shop-**ABL** buy-CP can-FUT-1p not
（我々は）それを８月から（**ru**）店で（**ru**）買うことができないだろう（1p）。

同一格連続を排除する制約が点検する事項は、格形がどんなであるか、だ。これに関して３点の事実を指摘できる。第１に、同一格連続の制約は、格の文法的由来によって区別しない。名詞句が動詞の必須項か付加的項かの違い、あるいは、格の決まり方が文法関係（例、目的語）によるか意味（例、手段、場所、着点、出発点）によるかの違いは、問われない。例えば、(16)では、２名詞句はともに動詞「見せる」の必須項だが、(18)では、「８月から」は「買う」に係る付加的項である。第２に、３格はそろって、同じ環境で同一格連続が許され、同じ環境で排除される。第３に、これらは１音節であるという点で仲間である（表(3)と表(4)を対比されたい）。

同制約は格形の実現のしかた（名詞句に付与された格をどんな条件で表出できるか）に関するものだ、と結論付けることができる。格付与のしかた（どんな条件でどんな格が名詞句に付与されうるか）についてではない。

［第６節の非人称受動文は、述語形が「接続分詞＋なる-3s」。これとは別に、「動名詞＋なる-3s」のものもある。］

5. 主語を欠く節とは？

(1)の①で述べたように、節が主語を欠くというのには２つの場合 A, B がある。１つにまとめたい衝動に駆られるが、実際にはできない。第４節で見てきたのは、A の規定に引っ掛かる事例である。第５章では、A の規定からはすり抜けてしまうが、B の規定には引っ掛かる事例を見る。

5.1 斜格主語構文

(19)のように、斜格主語構文では、同一格連続は不可能である（Yamabe 1995）。適格な文を得るには、同一格の名詞の間に１語 kintu（しかし）を介在させればよい。

(19) *saaran-**ku*** **(kintu)* *pilaa-Ti-**ku*** *bhala laag-u-ni.*
sir-**OBJ** however boy-C-**OBJ** like-PROG-not3s しかし、あの方は（***ku***）使用人が（***ku***）気に入らない。

斜格主語構文は、斜格名詞が主語位置にあるようなので、A の規定には引っ掛からない。しかし、斜格主語は意味的に経験者であって動作主でないので、B の規定には引っ掛かかる。

5.2　非情物主語の他動詞

(20a)のように、非情物主語の他動詞文においても、同一格連続は不可である。１語の「飲酒」を２語の「酒を飲むこと」に取り替えればよくなる。これに対して、(20b)のように、主語が人なら同一格連続が可能である。［nibruta kar- ‘stoppedA make-’］

(20) a. *Daaktaranka nirddesa saaran-ku jaanuaari-**ru*** { **madapaana-**ru*** ｜*mada khaa-ibaa-**ru*** } *nibruta kar-ich-i.*
doctor's direction saar-OBJ January-ABL drinking-ABL liquor drink-GER-ABL stop-PERF-3s
医者の指示が、あの方に１月から（***ru***）{飲酒を（****ru***）｜酒を飲むのを（***ru***）} 止めさせている。

b. *Daaktar saaran-ku jaanuaari-**ru*** { *madapaana-**ru*** ｜*mada khaa-ibaa-**ru*** } *nibruta kar-ichanti.*
doctor saar-OBJ January-ABL drinking-ABL liquor drink-GER-ABL stop-PERF-3p
医者が、あの方に１月から（***ru***）飲酒を（***ru***）止めさせている。

(20a)では、主語は意味的に原因であり動作主でないので、B では捉えられる。しかし、(20)のような他動詞文は、(10)〜(12)のような目的語制御構文と異なり、従属節を想定できず、A に引っ掛かるような箇所を想定できない。

6.　同一格連続の排除の領域が延びる

同一格連続の排除領域（点検領域）は、主語を欠く節じたいでとどまらない。その下位や上位の節へ延びる。

まず、排除領域が下位の節へ浸透している事例。(21)の例文は対比をなしている。「思う」の補文が、(a)ではいわゆる small clause、(b)では時制節。これら補文のさらに補文において同一格連続が、(a)では不可能、(b)では可能。(21a)では、形容詞「適任な」を主部とする形容詞句 AP は、主語を欠く節（述語の投射で、統語的主語位置を欠くもの）にあたる。それの補文 S1 において同一格連続が排除される。S1 には主語△があるのにそうなる。（代案として、「適任な」が時制を持つかどうかにより、それの補文 S1 が主語△を持つかどうか決まる、とも考えうる。）

(21) a. *maalika mo-te kintu*
owner me-OBJ however
［AP ［S1 △ *atithin-**ku** bil-guDaa(-*ku) dekhe-ibaa paai~*］*jogya* ］ *bhaab-u-naah-aanti.*
guest-OBJ bill-C-OBJ show-INF fit think-PROG-not-3p
しかし、店主は僕 *i* を
［AP ［S1 △*i* お客に（***ku***）請求書を（****ku*** ｜-ϕ）見せるのに ］適任に ］思っていない。

b. *maalika mo-te kintu*
［S2 △［S1 △ *atithin-**ku** bil-guDaa(-**ku**) dekhe-ibaa paai~*］*jogya*］ *boli*］ *bhaab-u-naah-aanti.*
しかし、店主は僕 *i* を
［S2 △*i*［S1 △*i* お客に（***ku***）請求書を（***ku*** ｜-ϕ）見せるのに］適任だと（*boli*=CPL）］思っていない。

反対に、排除領域が上向きに延びている事例もある。(22)の例文は対比をなす。「言う」の補文が、(a)ではいわゆる small clause、(b)では時制節。同補文の上位にある主節において、同一格連続が、(a)では不可能、(b)では可能。(22a)では、主語を欠く節は、形容詞「無価値な」を主部とする形容詞句 AP である。それの上位の節である主節において同一格連続は排除される。主節じたいには主語「あの方」があるのにそうなる。

(22) a. **saar sabhaa-**re** raaga-**re** se kaama-ku* ［AP *mulyahina* ］ *kah-il-e*
sir meeting-LOC anger-LOC that work-OBJ valueless say-PAST-3p
あの方は、集会で（***re***）怒りで（****re***）その行為を［AP 無価値に］言った。（日本語訳は逐語的）

b. *saar sabhaa-**re** raaga-**re** se kaama-ku* ［S △ *mulyahina boli* ］ *kah-il-e*
あの方は、集会で（***re***）怒りで（***re***）その行為を *i*［S △*i* 無価値だと（*boli*=CPL）］言った。

対案として、排除領域の大きさは一定だと想定する分析は、事実を捉えることができない。そのような考え方にしたがえば、領域が広がっているように見える事象については、同一格の２名詞がともに主語を欠く節の中へ入ってきていて、同一格連続を排除する制約はその状況を排除しているのだ、ということになるだろう。例えば、例文(21a)では、２名詞句がまとまって S1 から AP の中へ入っている。(22a)では、２名詞句がともに AP の中まで下がっている。次のように：

［AP　*NP-***ku** NP-***ku***　［S1 △　~~NP-*ku* NP-*ku*~~ ］］(=21a)　　*saar*　~~NP-***re*** NP-***re***~~　［AP *NP-***re** NP-***re***　］(=22a)

そうすると次のような疑問点がわきおこる。なぜ２名詞句が組になって移動するのか。左の例ではなぜちょうどそこで移動が止まるのか。右の例ではなぜ下向きに移動するのか。

７．　残った疑問・これからの課題

同一格連続を排除する制約（以下、本制約）について、疑問が残る。(1)で述べた規則性①②が存在する理由は？①については、なぜ節に主語が存在することが同一格連続を可能にするのか。①との感覚的な類似点が、Burzio の一般化（Burzio 1986）や、dependent case の付与条件（Marantz 1992）との間に指摘できる。後２者によれば、節に主語が存在することによって、目的格 accusative が可能になる。節に主語があることには、その節の格標示のレパートリーを広げる働きがある、という感じがする。もちろん相違点も目に付く。オリヤ語の制約は、(i) 目的格だけでなく３つの格に関わる；(ii) ある格の１個の存在でなく２個の存在を規制する；(iii) 初めて格が与えられるかではなく、すでに持っている格が表出できるかどうかを決める。

事実のさらなる解明も望まれる。本制約を取り巻く文法体系がどうなっているのか、これまでの調査によって一部分がぼんやりと見えてきたというぐらいだ。例えば、②（第６節）に関しては、本制約は、点検する統語的領域を、節を越えて延ばす。方向に関しては上向き下向きの両方向だ。ところで、本制約は、restructuring（補文が統語上の主語を欠くこと）構造を検出するいくつかのテスト（山部 2016）の１つだ。ということは、それら他のテストを使っても、本制約と同じか似たしかたで文中の広範囲にわたって restructuring の兆候が見られるのだろうか。

記号　例文のグロス：ABL=ablative, AP=adjective phrase, CAUS=causative, C=classifier, CP=conjunctive participle, CPL=complementizer, EM=emphatic, FUT=future, GEN=genitive, INF=infinitive, NOM=nominative, NP=noun phrase, OBJ=objective, p=plural, PAST=past, PERF=perfect, PROG=progressive, S＝clause, s=singular; VP=verb phrase, 1/2/3=1st/2nd/3rd person, *網掛け=不適格な表現。　オリヤ語の発音：a [ɔ], aa [a], D,L,T = retroflex, ~= nasalization.

引用文献

Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax*. Reidel.

Marantz, Alec (1992) Case and Licensing. *ESCOL '91*.

Mohanan, Tara (1993) Case alternation on objects in Hindi. *South Asian Language Review,* 3(1), pp.1－30.

_____ (1994) Case OCP: A constraint on word order in Hindi. M. Butt *et al*., eds., *Theoretical perspectives on word order in South Asian languages*, pp.185－216. CSLI.

Wurmbrand, Susanne (2001) *Infinitives: restructuring and clause structure*. Mouton de Gruyter.

Yamabe, Junji (1995) The cases in the oblique case subject constructions in Oriya. *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies* 7, pp. 46－82.

山部順治 (2013)「オリヤ語における二重目的格制約」『日本言語学会第 147 回大会予稿集』147

_____ (2016)「オリヤ語において、非情物主語が引き起こす、複文の統語的縮約」『日本言語学会第 153 回大会予稿集』

D-7

ポポロカ語 *tí 「やつ」の文法化

中本 舜 (メキシコ国立自治大学)
shun@nakamoto-family.org

1 はじめに

1.1 *tí* の諸機能

ポポロカ語（オトマンゲ語族、メキシコ）には、同語派の別言語にはない多機能な形態素 *tí* がある。テマラカユカ方言に例を取れば、(1) ではフィラーとして、(2)-(4) では ‘(の) やつ’ 相当の名詞化標識として、(5), (6) では定動詞を含む関係節標識として、(7), (8) ではそれぞれ場所と時間を表す従属節標識として機能する。(§3 に例示する通り、他の方言には定冠詞、場所疑問詞、条件節の導入などの用法がある。)

(1) ***tí*** ∼ ***tí***ʔà ***tí*** ‘えっと’

(2) ***tí*** *jùà*
TI 緑
‘(何か) 緑のやつ’

(3) ***tí*** *hiʔì*
TI この
‘これ’

(4) ***tí*** *leɲeéruʔ*
TI 木こり
‘木こりのやつ (物語)’

(5) *júu kústaʔ* ***tí*** *tʃunda* ***tí*** *gránsaʔ k(w)^{H}-undʒjáʔà=ná*
二 袋 TI HAB:持つ:A3 TI まぐさ PFV-選ぶ:A1B3=1PL
‘私たちが選んだまぐさが入っている二つの袋’ (150722-003 28:31)

(6) *hàj, méʔè fréskuʔ* ***tí*** *ndʒìà w-íkíã̀ nà*
今日 だから 新鮮 TI ケリテ PFV-持ってくる:A1 ASR
‘(行ったのは) 今日だ。だから、私の持ってきたケリテ (山菜) は新鮮だ’ (150722-003 18:37)

(7) *sá-kw^{H}-hi=ni* ***tí*** *híi heʔe=nɖʐá*
TLOC-PFV-行く:A3=IAG TI いる:A3 PRON:3=F
‘彼は女がいるところへ去って行った’ (160718-002 10:22)

(8) *kw-ìì=hãʔ w-ingíhnaʔ=hãʔ hãʔ+mamas(i)íta(ʔ)-^{H}nà* ***tí*** *k(w)-útʲe-^{H}ʔè*
PFV-来る:A3=HONF PFV-助ける:A3=HONF HONF+ 母-B1 TI PFV-結婚する-B3
nɖʐí+kítʃíã̀
F+ 妹:B1
‘彼女は私の妹が結婚した時に母を助けに来てくれた’ (150317-003 00:37)

Veerman-Leichsenring (1991:355) が指示詞としてメツォントラ方言の *tí* の分布を記述し名詞化機能に触れているほかは、簡潔な辞書項目 (Austin Krumholz et al. 1995; Stark 2014) があるのみである。本発表では、共時的な分布と語源から文法化の経路を記述し、通方言的な諸機能の分布からその用法拡張を記述する。

1.2 ポポロカ語の概要とデータ

ポポロカ語 (Popoloca) は、チョチョルテク語 (Chocholtec) とあわせてンギーワ語 (Ngiwa) と称され、マサテク語 (Mazatec) やイスカテク語 (Ixcatec) とともにオトマンゲ語族 (Otomanguean) ポポロカ語派 (Popolocan) の一派をなす。ポポロカ語はメキシコ合衆国プエブラ州南部の町テワカン周辺の 10 の村で約 2 万人によって話され、テマラカユカ方言、トラコヤルコ方言、およびその他すべての村で話される南西方言に大きく分類される。語彙的・文法的に声調とフォネーションを用いる。語順は厳格な VSO (述-為-被/受-

対象) で、VO 言語の典型的な類型論的相関を示す。アラインメントにおいて自動詞三分裂を示す。主要部標示型で、名詞句が格表示を欠く一方で、述語や被所有名詞に人称が標示される (行為者系列を A、被動者・所有系列を B、対象系列を C、身体部位所有系列を POSS とする)。動詞は常に定形で現れる。単純前置詞に乏しく、複雑前置詞の発達していない方言はアプリカティブや空間関係に特殊化した動詞を多用する。

引用されているものを除いたデータの出典は以下の通り: ポポロカ語トラコヤルコ方言、アツィンゴ方言、オトラルテペク方言のデータは SIL メキシコ支部やプエブラ州教育省などから出版されたテキストを元に発表者が構築したデータベースによる。ポポロカ語 16 世紀テペヒ方言のデータは教理問答 (Roldán 1580) に基づく。その他のデータは 2013 年 11 月以降の発表者のフィールドワークに基づく。現代語は本発表の正書法に修正している。古典語は元綴りを保ち、正書法上の語境界を適宜変更している。

1.3 本発表の構成

本発表の構成は以下の通り: §2 では共時的な分布に基づく内的再建と比較再建によって *tí の文法化の経路を記述する。§3 では通方言的な諸機能の連関からその用法拡張を記述する。§4 では *tí ‘やつ’ とともに *thĩ ‘日’ を *tí* の語源とみなす仮説を検証する。§5 では結論を述べる。

2 文法化

§2.1 では、*tí* が名詞に由来することを示す。§2.2 では、*tí* による関係化と人間名詞主要部の名詞複合が競合する分布を示すことを指摘し、文法化の中途段階を内的再建する。

2.1 *tí* は名詞に由来する

tí が名詞由来の形態素であることを示す根拠が少なくとも 3 つある。第 1 に、同語派のマサテク語において規則的な音対応を示す語 *ti* は「少年」を示す (9)。

(9) *ti* ‘少年’ (マサテク語ソヤルテペク方言)

第 2 に、テマラカユカ方言において、 *tí* は他の名詞と同様に単独で 3 人称強調代名詞 *heʔe* に後続することができる (10)。この場合、軽蔑のニュアンスを含んで特に未婚の男女を示す (cf. §2.2)。

(10) ***heʔe***=*tí*
PRON:3=TI
‘やつ’ (ポポロカ語テマラカユカ方言)

第 3 に、フィラー *tíʔà* は (語源的に) 名詞に後続する遠称指示詞 =*ʔà* を含む (11)。

(11) *tí*=***ʔà***
TI=DIST
‘えっと’ (ポポロカ語テマラカユカ方言)

以上から、*tí は名詞由来であると考えられる。

2.2 *tí* は人間名詞を主要部とした複合に由来する

Nakamoto (2016) は、主要部と従属部の間の統語的・意味的な緊密度の違いによって複合境界に適用される形態音韻規則や語全体の音素配列論的制約が異なることを指摘し、2 種類の左側主要部名詞複合（緊密な複合と緩い複合）を区別した。人間や動物を指す一部の名詞が主要部にあるとき、必ず緩い複合が用いられる (12)。

(12) *ku+tʃìngà*
動物 + 豚:AUG
‘くそ豚’ (**kùtʃìngà*; ポポロカ語テマラカユカ方言)

ku は緩い複合によって後部要素 *tʃìngà* と結びついているため、指大形による低声調の上書きを被らない。

これら緩い複合に用いられる名詞が主要部外在型関係節を作る際、(5) や (6) の場合と異なり、*tí* が現れることはできない (13)。

(13) *ʃã+[t-hànga?-ʃĩ nd^{j}àà]*
子 +HAB-飛ぶ:A3-INS 木
‘乗り物で飛ぶ子ども’ (**ʃã̀ tí thànga?ʃĩ́ nd^{j}àà*; ポポロカ語テマラカユカ方言)

この特異な分布上の制約は、*tí* がこれら人間や動物を指す名詞とパラダイムをなしていたと考えると説明がつく。この仮説に従えば、*tí ははじめ (マサテク語の同源語が示唆するように) 人間を指す名詞であり、その他の人間・動物名詞とともに特別な地位を持った名詞として文法化し、さらに (‘やつ’ のようなもともと持っていた軽蔑的な意味のために) 意味の漂白をへて名詞化標識として文法化したと考えられる。

3 通方言的な機能の分化

本節では、前節の見方に立って *tí が名詞化標識として文法化したものと仮定し、通方言的な機能の分化を概観する。まず、ポポロカ語諸方言に見られる *tí* の用法を概観し、節末に用法拡張に関する観察を述べる。

テマラカユカ方言について挙げた (1)-(8) の他に、それ以外の方言には大まかに次のような用法が認められる。

(i) 場所疑問詞: 南西方言の多くは *tí* ないし *ngetí* を ‘どこ’ 相当の疑問詞として用いる (14), (15)。

(14) *tʃhu?ẽ́,* ***tí*** *ts-hi=a*
HAB:待つ:A2B1 どこ POT-行く:A2=2SG
‘待て、どこへ行くんだ’ (160310-004 01:25 ポポロカ語アルモロンガ方言)

(15) *kaĩ́ thù kw-hátë?è thù* ***ngetí*** *ʈʂú-kw-?ʻiʃĩ tʃhaàsĩ*
全て 山 PFV-応える:A3B3 山 どこ IRR-PFV-ある 村
‘全ての山が、村がどこにあるべきかについて賛成した’ (ポポロカ語アツィンゴ方言)

これを持たない方言では、南西方言の「の方向」に対応する *núú* が用いられる。トラコヤルコ方言においてはさらに近称の *khá* が併用される。

(ii) *he?e tí* NP: テマラカユカ方言以外は、3 人称強調代名詞 *he?e* に *tí* を後続させ、さらに名詞句を続けることができる (16), (17)。

(16) *he?e* ***tí*** *ʃã̀+ndʒĩ́ĩ́ hì?à wak-ikaw-?a=ʃã̀ niù ngaĩ̀* ***tí*** *ʃã̀ júu*
PRON:3 TI 子 + 小さい その PST-持って行く:A3-NEG=子 トルティージャ 一緒に TI 子 2
kaʃĩ́
いくつか
‘弟はトルティージャを 2 人の兄たちに持って行かなかった’ (ポポロカ語トラコヤルコ方言)

(17) *itʃi?, ndʒiìt^{j}hà, kàʃí nà… me nà* ***tí*** *sé+tʃhì=à nà sí-tʃ?éna*
土鍋 コマル 全て TOP CLEFT TOP TI 3PL+ 女=その TOP POT-形作る:A3

‘土鍋、コマル (土製のホットプレート)、全ては……女たちが形作るんだ’ (ポポロカ語メツォントラ方言; Veerman-Leichsenring 1991:392)

これは、テマラカユカ方言に観察される *tí* の分布に関する制約 (§2.2) を失ったものと分析することもできる。しかし、*heʔe* の後に名詞句が現れる際にほぼ必ず *tí* が現れることから、意味的な要請とも考えられる。

(iii) 定性標識: テマラカユカ方言以外では関係化や従属節の有無にかかわらず名詞の前に *tí* が現れうる (18), (19)。

(18) ***tí*** *tʲhã̀+rîì ndìtù̀ ndʔé tʲhẽ=tʲhã̀*
TI F+ 女 とても 美しい 座っている:A3=F
‘彼女はとても美しい女性だった’ (ポポロカ語オトラルテペク方言)

(19) *ndáʔà kaàwí t-útʃhi* ***tí́*** *traste=à*
あそこ も HAB-売れる TI 食器=DIST
‘あそこでは食器も売っている’ (ポポロカ語メツォントラ方言; Veerman-Leichsenring 1991:393)

(iv) 条件節の導入: アツィンゴ方言は条件節の導入に *tí* を用いる (20)。

(20) *ä̈ndá* ***tí*** *t-ʔitʃhã́ʃ̃ʔì=sí́* *ndä̈, là* *ts-hàhũ=sí́* *jaá tʃáhã̀ kíʃ̃*
しかし もし HAB-必要とする:A3B3=3PL 水 では POT-与える:A3=3PL 2 子供 のために
ts-ʔájéʔë=sí́ *heʔe=sí́*
POT-受け取る:A3B3=3PL PRON:3=3PL
‘でも、もし水が欲しければ水を受け取るために子供を 2 人犠牲に捧げなければならない’ (ポポロカ語アツィンゴ方言)

テマラカユカ方言などでは、動詞の TAM 屈折によって条件節を表す。

(v) 補文標識: オトラルテペク方言では (21), (22) のように補文標識として広く *tí* が用いられる。

(21) *ndáru=sẽʔ tʔaʈʂè- ´ʔè=ni,* ***tí*** *tʲhã̀+tsùjùà, nʔ(a)- ´è tʃʔĩ́+ʃiiku*
言う:A3=3PL 祖父-B3=1IN TI F+ ツユワ 母-B3 M+ マサツィン
‘私たちのおじいさんたちが言うには、ツユワというのはマサツィンの母だということだ’ (ポポロカ語オトラルテペク方言)

(22) *táã̃ ndʒʔũ jã̀, tʃʔĩ́+ʃiiku w-itw-ʔẽ=tʃʔã́* ***tí*** *ts-ʔẽ́-ʔjã=tʃʔã́*
その時 日 その M+ マサツィン PFV-律する-B3=M TI POT-死ぬ (C)-NEG=M
‘その日からマサツィンは不死の存在になることを課された’ (ポポロカ語オトラルテペク方言)

補文標識としての機能を発達させていない方言では音形を持つ形態素は現れない。

(1)-(8) および上 (14)-(22) の例からは、以下の観察が可能である: (i)*tí* の分布の制約となる人間・動物名詞との平行性がなくなることにより、*tí* は定性標識などにも似た分布を見せる; (ii) 南西方言に場所関連の *tí* が観察される; (iii) 南西方言の一部に補文標識や条件節導入などの用法拡張が見られる。

4 メツォントラ方言 *tĩ́* と *thĩ ‘日’

メツォントラ方言では、*tí* の代わりに *tĩ́* が現れ、その機能は *tí* を持つ他の南西方言一般と大方共通する。例えば (23) は時間を表す従属節ないし「時代」の関係節標識と分析することができる。

(23) *a hiì* ***tḿ*** *tiempo tʲhéhù=ná nà*[...]
でも 今 TI 時代 生きる:A1=1PL TOP
'でも今私たちの生きる時代は...' (ポポロカ語メツォントラ方言; Veerman-Leichsenring 1991:395)

ポポロカ語 16 世紀テペヒ方言 (24) や同時代のチョチョルテク語 (25) における、<thiy>(およびその正書法上の異形) が同様の機能を持つ。[*1]

(24) *t-ijtecágu-a nda* ***thî*** *v=cu-èe thènij cruz*[...]
HAB-信じる-A1 SUB TI もう=PFV-死ぬ (C) の中で 十字架
'もう (イエスが) 十字架で死んだ時...と私は信じる' (ポポロカ語 16 世紀テペヒ方言; f. 20r)

(25) *cau 2 t*[omin]*es tz-iiØ caunjinja* ***thiy*** *choxu-Ø nchaa cûndasaqh missa*
と 2 トミン (通貨) POT-行く-A3 ろうそく 時 言う-A3 さま 司祭 ミサ
'そして、司祭がミサと言えば 2 トミンがろうそくへと行く' (17 世紀初頭チョチョルテク語; Swanton 2016:277)

これは、現在ポポロカ語では用いられないが、イスカテク語 *thĩ* '日' (Fernández de Miranda 1961) やマサテク語ソヤルテペク方言 *nìthĩ* '日' に対応し、また同じ表記で '日' を表す例はテペヒにも (*thi domingo*; f. 21r) チョチョルテクにも (cf. Swanton 2016:276) 観察される。では、鼻母音を持つメツォントラ方言の *tḿ* は*thĩ '日' に由来し、時間を表す従属節標識などとして文法化を始めたのだろうか。

この仮説への反論となる根拠が 2 つある。第 1 に、当のメツォントラ方言は時間を表す従属節標識に別の形態素 *ndʒja* (Veerman-Leichsenring 1991:95, 98) を用いる。他にも、トラコヤルコ方言の *áre* など、語源的にも関係のない形態素が用いられることが多い。

第 2 に、16 世紀テペヒ方言の <thiy> は名詞化の機能を十分に発達させている。例えば、(26) における *tî* による名詞化は、より語彙的でより古い *kwhà- による名詞化 (27) と同様に分裂文の第 2 項として現れる。

(26) *yuúxî nà : mèe ti chùe=ñi* sanctisimo sacramento
第 2 CLEFT TI 受け取る:A3B3=IAG 秘跡
'第 2: 秘跡を受け取ること' (16 世紀テペヒ方言; f. 22r)

(27) *yaá ndiyáxî na : mèe qhua-t-ièxî=ñi*
第 2 条 CLEFT NMLZ-HAB-理解する:A3B3=IAG
'第 2 条: 理解' (16 世紀テペヒ方言; f. 25v)

よって、*thĩ '日' に由来する形態素が方言によって *tí 'やつ' に由来する形態素と音韻論的に合流した可能性は捨てきれないものの、*thĩ '日' が主な語源となって名詞化標識として発展した可能性は低い。

5 結論

ポポロカ語の *tí* は、'やつ' のような人間を指す名詞から文法化した名詞化標識で、方言によっては顕著な用法拡張が見られる。また、 *tí* には *thĩ '日' が音韻的に合流している可能性を指摘した。

[*1] 植民地期文献の読解一般と特にテペヒ方言の <thî(y)> の語源に関する指摘について、Sebastián van Doesburg と Michael Swanton に感謝する。

参考文献

Austin Krumholz, Jeanne, Marjorie Kalstrom Dolson, and Miguel Hernández Ayuso. 1995. *Diccionario del popoloca de San Juan Atzingo*. Tucson: Summer Institute of Linguistics.

Fernández de Miranda, María Teresa. 1961. *Diccionario ixcateco*. Instituto Nacional de Antropología e Historia.

Nakamoto, Shun. 2016. Two types of noun compounding in Temalacayuca Popoloca (in Japanese). Presented at 152nd Meeting of the Linguistic Society of Japan, Keio University, Tokyo, June 25.

Roldán, Fray Bartholomé de. 1580. *Cartilla y Doctrina Christiana, breve y compendiosa, para enseñar los niños: y ciertas preguntas tocantes a la dicha Doctrina, por manera de dialogo: traduzida, compuesta, ordenada, y romançada en la lengua Chuchona del pueblo de Tepexic de la Seda*. Mexico: Casa de Pedro Ocharte.

Stark, Sharon. 2014. Preliminary dictionary of Northern Popoloca. Available at: www.sil.org/resources/archives/57186.

Swanton, Michael. 2016. A history of Chocholtec alphabetic writing. Doctoral Dissertation, Leiden University.

Veerman-Leichsenring, Annette. 1991. *Gramática del popoloca de Metzontla: con vocabulario y textos*. Amsterdam: Rodopi.

略号一覧

1 2 3 (人称); SG PL EX IN (数と包括); A B C POSS (人称標示系列); IAG (不定行為者) F (女) M (男) HONF (女敬) HONM (男敬) CHILD (子供); HAB PFV POT IRR (TAM)